

メノウな子とおほほんのおばばです。

小林陽子

梗概

中学二年生のメノウが、深夜になっても帰ってこないの、わたしはイライラしながら待っていた。

メノウはわたしの産んだ子どもではない。この子が四才のとき、娘のサキがわたしの手元において男とインドにいったのだ。バツイチの自由な身、これからわたしも人生のやり直しというときに、子育てのやり直しをするはめになったのである。

学校時代の親友の都子から、「このとてつもなくおかしな時代、一番元気なのは、わたしらばあちゃんなんよ。サキちゃんは病氣と思ってあんたがしっかり育てな」とそそのかされ、いや励まされてやけのやんばち子連れ旅、とばかりメノウをつれまわし地球を彷徨い歩いたりなんぞして、ひと称んで旧石器人、幼いメノウとの野生の暮らしがはじまったのである。父の死後遺産を相続して働かなくとも食べていけたからできたことだが、やがてバブルは弾け、おきまりの保証人倒れで無一文になり、湘南の家を人に貸し九州は長崎へ。メノウとわたしのあらっばい野生の暮らしが役にたった。あまりに自然児のメノウは思春期の入り口で不登校になるが、学校なんざ行かなくて生きていけるわと開き直っていたら、学校に行きだした。と思ったらくんどもは突然の家出？

なんとかれは、一週間して女の子をつれて帰ってきたのである。

午前零時。メノウはまだ帰ってこない。
ここにきて、ついに？ずっこけたか。

あんたまだ十四歳。中学生なんだよ。学校帰りのちよつとした寄り道くらい大目にみよう。だけど中学生の門限が午前零時はないでしょう。それが夜な夜な午前サマなんてあんましじゃないの。

メノウあんた今日、学校で神父さんから呼び出されたってね。九時半ごろ、電話があったよ。まだ帰ってませんって言ったら、メノウはもう帰ってこないかもしれないって、パニックしてた。メノウと何を話されたのですかと訊いても答えてくれない。もうもどってこないかも、とそればかり。声が震えてた。元暴走族の若神父、やたら気が好いんだよね。メノウはだいたいすぎだった。

だけどもういいよ、あそこの寮は。

禁制の夜間外出。追い出されたのか、おん出たのか、メノウは突然、いくつかのダンボール箱に詰めた荷物と一緒にうちに帰ってきた。メノウはなにも言わない。わたしもなにも訊かない。

きみはどうだってじぶんに正直にしか生きないタイプなんだわ。それが損だとわかってても、ちよつと取り繕ってうまくやるってことができないんだね、うん？。

だけどまずいよ。また神父さん電話かけてきたらどうする？

どこにいるのよ、まったく。例のゲーム・センターの三階か。いつも午前零時を過ぎるとじつとしていられなくなる。とにかく家をとび出さずにいられないのだ。ここは風頭山の中腹、街に出るに石段三百段を駆け降りるか、墓地の雑木林を抜けて山を下りる近道をゆくかしかない。メノウのジャンパーをひっかけ、懐中電灯を握りしめ我が家から西側の空き地を突っ切って墓地の雑木林に入るのが近道。寺の破風がみえてくると墓地もきれいに整えられて歩きやすいし、街灯のあかりが途絶えることもない。寺前のバス停から浜の町アーケードに通じる路をまっすぐに歩いてゆく。鉄橋の向こうにゲームセンターのビルがみえるやアーケードを駆け抜けるべく猛然と走り出す。

ジグザグに並んだゲーム機のいちばん端っこにメノウがいるんだよね、たいてい。

血相かえて三階まで一気に駆け上がり、はあはあ息を弾ませながらきよるきよると子さがすの図。山姥か、はたまた鬼子母神。

あの子はいつも誰かといっしょにいる。ゲーム機の迷路をつぶさに辿り、少年たちの顔をひとりひとりたしかめてゆく。

息をととのえ、わたしはしずかにあの子の脇に立つ。

「メノウ、時間ぎれだよ、十二時をとくに過ぎている。帰ろう」努めてオゴソカに言う。「うん、わかった」わたしのほうは見ないで、視線はゲームの画面に釘づけのまま。両手はマウスのボタンを痙攣するように小刻みに叩いている。もうひとり、Gパンに地味なグレイのシャツを着た男の子が肩をくっつけるように並んでいた。かれも中学生だろうか。じつと見詰めるわたしにちよつと困ったように頭をこくと下げた。

「あんたねえ、こんな遅くまでゲームなんかしてたらヤバイよ」ぐつと声を低める。

「わかったって。いまずぐこれをクリヤーするから待ってて」

目はふたりとも画面から離さない。これまた真剣。生死を賭けてるっていうか。オタクっぽい生真面目さだ。

いつまで待たせるのよ。イライラしながら周囲を点検する。さすがにこの時間には四、五人のくたびれた感じの若いのがゲーム機に取りついてるだけだ。小中学生の子どもの姿はない。メノウは中学生だけれど。

「ゴメン」

メノウはふてくされたふうでもなく鞆をよいこらしよなんぞと云いながら持ち上げ、わたしについてくる。いつだってこんなことの繰り返し。

《あなたの子は、あなたの子ではありません》

と、のたもつたのは、レバノンの詩人カール・ジブラン。「預言者」のなかの一節である。メノウはわたしの産んだ子どもではない。

結婚生活を途中で辞めたのが三十三歳のとき。五年後に十代の子どもたちを引き取ったというより、かれらがつぎつぎにわたしの許にやってきたのだ。

思春期まっさかりの子どもたちとの、湘南の海辺での暮らしはなかなかのものだった。合宿生活みたいだったな。やがてかれらはそれぞれ家を出ていった。筈なのだが、なんと娘のサキが四歳になったばかりのメノウをわたしのところに置いて、男とインドに往ってしまったのだ。

かくしてわがジブランの、

《あなたを通してやってきますがあなたからではなく、あなたと一緒にいますが、それでいてあなたのものでない》、メノウとわたしとの生活が始まった。

やけのやんばち子連れ一匹メス狼、である。

全国のサファリ・パークを巡り北海道までクマとキタキツネに会いにゆき、それでも足りず「地球一周の旅」なるツアーに参加した。しかしこれは失敗であった。だいたいメノウとわたしは集合時間が守れない。夢中で遊びまわり、時計を見るのも集合場所も忘れてしまう。メノウとわたしのために船は出港時間を大幅に遅らせた。デッキから大勢の人が見守るなか、メノウとわたしは斜めになって栈橋を駆け抜け、船に駆け込んだ。とたんにハッチが閉まった。人々は歓声をあげてくれたのだが、船長と添乗員から大目玉を喰らい、メノウとわたしは涙をながした。ツアーというものの性質をわきまえず参加してしまった軽率さを悔やんだのである。

面白くないのは一か所に長くいられないことだ。太平洋の島々には最低二十日くらいずつのんびりしたかったのに。アマゾンの川下りもできなかった。それでもアルプスのちっちゃな頂きにも登ったし、バリ島の海辺で踊り、アフリカでは気球に乗って大地に沈む夕日を見た。山野のいたるところでキャンプをし、野宿し、草でも虫でも現地のおべ物に食らいつく。着る物も現地あつらえ、バリのサルーンやインドのパンジャビ服は気にいって旅行のあいだそれで通した。が、ヨーロッパとなるとそうはいかない。子連れには厳しい。なんせメノウはすぐに歌いだすし、わたしは踊りだす。先進国とは相性がよくないらしい。

「まあ、これからやつと楽になれるというときに、お孫さんのお世話じやたいへんねえ」と憐憫の声々。

「なんの。わたしだっただのしまなきや、やってらんないわと、野生化したのである。わーお。」

あの頃は遺産相続で振って湧いたようなお金が使えた。しかしバブルとはまことシャボン玉。さる証券会社のセールスマンにみごとに騙されて、気がつくとい文なしになっていた。証券マンは行方不明になり、これでは泣き寝入りだと人は騒いだが、わたしはべつに泣きもしなかった。もともとなにゆえか、お金というもの、よくわからない。貨幣経済、資本主義機構には向いていないのよ。わたしの感覚はまだ物々交換の原始時代に生きている。そのうえ、じぶんで稼いだお金じゃなし、貰うのが申し訳ないような気分であったから、あ、そう。なくなっちゃったのねというふうであった。

逗子の家と土地はきれいに残ったが、一文なしになれば、若いころ習い覚えた染色やピアノを教えるだけでは暮らしていけない。ならばと家を出て人に貸し。メノウはこの街の修道院付きの寮に入れ、わたしもメノウについて長崎は風頭山の神社の裏に移り住んで、逗子の家賃ではそぼそ食べてゆく仕儀にあいになったわけである。ときに湘南恋しの思い募るも、生来の放浪好き。テレビドラマみたいな人生ね、みていて退屈しないわと中学時代のクラスメートに面白がられて、けっこうその気になっているのだ。

かくてメノウを連れまわしての地球旅行も、はかなきシャボン玉よろしくあえなく終わった。メノウはもの覚えのいいほうではないらしい。イタリアもフランスもアフリカも、「ぜんぜんおぼえてないよー」という。

子育てのやり直し。

いや、育てたのではない。メノウは勝手に育ったのであつて、わたしはただ、その辺に生えてるタンポポやクローバーが、勝手にのびて花咲かせるように、メノウがずんずん伸びてゆくのを邪魔しないようにしてただけだ。なるべく日当たりよくし、水もたっぷりあげはしたけれど、アララ育っちゃった、というふうである。

メノウは不思議な子だね。あんたが育てるところなるか。

わたしの母はつくづくと、曾孫をうち眺めていった。

ぼやんぼやんどものをいうメノウに、少し頭が足りないのじゃないかと思った、と。

好き嫌いが全然、ない。食べ物にも人にも。

怒る、ということがない。急ぐ、ということがない。やいやいせかしてもムダ。どだい急ごうという気がないのだから。保育園の運動会は見ものだった。よその子と競ったり負けて悔しがることもないからビリでもニコニコとひたすら嬉しそうに走っている。へんな子。

小学校は家の前の石段を下りてすぐ、二分とかからないのに遅刻してばかり、らしい。始業ベルが鳴っても意に介さず、なのだ。石段にしゃがみ込んでネコに話しかけていたり、アリの行列を顔をくつつけるようにして見入っているメノウをみたという情報はいってくる。

小学校の保護者会でのことだ。

「メノウちゃんてほんとにユニークなお子さんですねえ」

隣りで感に堪えたようにささやいたのは、おなじクラスの若いお母さんだ。

「ユニークというのかねえ。なんかよくわからん変わった子で」

「あら、あんなにのびのびと自由自在でいられるなんてうらやましいわ。いまだきメノウちゃんのようには緊張だのストレスに無縁な子どもはめったにいませんよ。帰りたくなったら学校からいつでも帰るし、宿題を出さなくても、ほかの子にからかわれても平気、ニコニコしてるんですって。メノウちゃんは特別扱いですよ。先生が面白がって好きにさせておられるから」

へえ、知らなかったわ。そんなふうになっているなんて。まあ小学校のあいだはよかったのだ。メノウとわたしの奇妙なライフ・スタイルも面白がられるくらいで。

寝たいときに寝て起きたいときに起きる。冬ともなるとほとんど冬眠状態。ふとんにくるとミノ虫のようにくるまつてひたすら眠る。おなかが空くと枕もとは、ふかし芋だの乾パンや豆菓子山盛りの盆がおいである。暖房は練炭火鉢に豆炭あんか。

「ねまき」というものを着たことがない。四年生の夏休み、林間学校に用意するものなかに「バジャマ」とある。はじめて買ってやったらメノウ、ひどく喜んで家のなかではいつもバジャマを着ている。おやつは海辺でビナやカラス貝を掘って捕り、山に入ってクワの実、ムカゴ、ヤマモグミ、スカンポの茎、といくらでも調達できる。

しかし、この生活は、これでけっこう忙しかった。欠席続きを心配した初老の担任教師が家庭訪問にきて言った。

「メノウくん、どうしているかと思って。おばあちゃん、ぐあい悪くないですか」

半白頭の担任教師はわたしと年が変わらないようだ。ゆっくりとした穏やかな口調に安心する。

「いえ、元気です。元気すぎて、道草ばかりしているみたいで、すみません」

「やあ元気ならいいんですよ。なんせメノウくんは、空たり閑たり天然居士、ですからね」

「はあ……」

なにやら遠くを見るまなざしで呟くようにしゃべる先生である。

「学校には、ちゃんとくるのですよ。ただ、校庭の裏の檜の木に登って授業が始まるのに気がつかなかったり、タヌキを追いかけて披露山に入り込んでいたり、——出たんですよ、ほんとにタヌキが。ついでに棒きれや木の枝を集めて陣地を作るのに夢中になっていた。やつとみつけて、こら、学校に戻れといったら、ボク忙しくて学校にいつてるヒマないのってね。たいしたもんです」

メノウとの相性は、よろしいようで。

あるときわたしはメノウを相手に嘆息したものだ。

「メノウ、ひとの心ってわからないね。じぶんの心もわからないんだから、そう思うときびしいね」

学校の保護者会のあいだでメモ事があったのだ。メノウは小学三年生、ちよつと首を上げていたが、確信にみちた輝かしい目をあげていった。

「さびしくなんかないよ。神さまは、ぼくたちの心のなかにいらっしやるんだよ」

ポンとちいさな胸をたたいた。

オーケイ、メノウ。あんたの信じる『神さま』をわたしも信じよう。運命共同体ってやつ。

メノウにとって教会がホームになったのは、元暴走族、ポニー・テールの梅木神父、通称ウメヤン神父のおかげというか、せいというか。学校から毎日教会に直行。いやウメヤンの部屋の冷蔵庫に、である。まずジュースもしくは麦茶などを飲む。神父はいる時もありませんがドアにはりつけてあったりする。つぎにチョコレートだのプリンだのをみつけて食べるらしい。

そう、学校に行っていない中高生がたむろする神父さんの煙草臭い部屋が、どうやらメノウにはいちばん居心地がよかったらしい。まだ小学生だから高校、中学生に混ざって入り浸りにはならなかったが。メノウは神父さんの帰りをソファのはじっこでおやつを食べながら待っている。

それから梅やんのお勉強、初聖体の準備が約一時間おこなわれるのだが、「もつのすぐくおもしれえ」というので若い神父とふたり、なにをしているのかなあと思う。この神父さんときあうようになってメノウのものの言いかたに変化あり。ま、いいでせう。わたしが迎えにいくと、

「メノウよお。ばあちゃんがきたぞ」と神父の大声。梅やんみたいな神父さまになりたい、とメノウが言い出したのはこの頃からだった。長崎の神学校入りのきっかけである。

いやだ。午前一時五十分になってる。

あの店は一時に閉まる。うちまでゆっくり歩いても二十分しかかからないのに。なんで帰ってこないのよメノウ。三分おきに時計を睨みつけてる。なんで？ なんなんだ。妄想、嫌な予感。十四歳なれどあやつは色白細身、ヒゲなし、喉ぼとけなし、いまだ第二次性徴の兆しなし。オクテなのである。腕力なんぞまるでなし、のはずだし。ワルに言いがかりつけられ。港の倉庫の暗がりでリンチ、波止場の堤防の突端に波しぶき。ゆらゆらと浪間に漂う少年の死体。れるれるよよよ、びつききなな。れるれるあだだ。げ。思考が翔んでる。もしかして。もしかしたらあ。う、やめどこ。念というもの、現実化するところがあるっていうじゃないの。インドのグルがいったぞ。

それにしても。

メノウ、どこにいる？ 闇の雲よメノウを覆うな。

ああ、もう待てない。うぐう……限界だわ。いやなんいやなん嫌なのよ。こんな人生。浜ん町まで降りてゲームセンターに「遊いんぐ」、片っ端から探してやらんば。なのに。

うつらうつらしていたらしい。テレビを見もしないのにつけっ放しにして。ぜつぼうが微妙な感じでひたひたと胸のまんなかの波打ち際まで打ちよせているよう。それがメノウが帰ってこないせいなのか、思うにまかせぬこの世の理不尽さのゆえか、わからぬわ。

だけどわたし、メノウと一体化しているところがあるからな。たとえばメノウは、一体化なんかしとらんよー、例の間びした調子でいうだろう。メノウがなにを考えてるのかわからなくなってるぶん、わたしもわたしがわからなくなっている。だけどそれ、関係ってもんでしよう。

わからないってことをわかるのが始まりなのに、それをわかってほしい、とおお、あなたがた。散々やったわねえ。メノウを気に入り、気にかけてくださる、ありがたし。されどメノウのやることなすこと理由をつけねば気がすまない。病気でもなく親が死にかかってもないのに学校に行かないなんてありえない。とにかく因果関係をでっち上げねば納まらない。すべて家庭環境。母親のせい。それがいちばん簡単だ。そりゃまったくそうではないといわないけれど、バカのひとつ覚えみたいに、

「親に捨てられたトラウマですよ。メノウくんは可哀そうにほんとに愛されたことがないんです」

トラウマ、トラウマってうんざりする。

あなたのその、わかったつもりのご忠告があらたなトラウマになりましたよ。ええい、寄ってたかっていい加減にせい。

わたしは憤怒の権化と化していた。あれらは不登校、不登校と意気込んでやってくるのだ。

おかあさんのせいです。おとうさんのせいです、って。だったら、その母、その父を育てた父のせい、母のせい、さらにまたその親を育てた親のせい、になるではないか。因果を辿れば果てしなし。アダムとイブにまで往きつかん。

不登校は半年や一年ではなおりません、長期戦と覚悟して待ってやってくださいだのといわれていたのに、中一の夏休みが終わると、メノウはごくあたりまえのように学校にいきだした。とつぜん、である。

前の晩のことだ。

「いつも何時に寝てる？」などとわたしに訊いてきた。あした学校から帰ったらさ、と口走ったではないか。するとこの子の心の中ではまだ、学校に通う生活というものが活きているんだ……思いがけなくもね。

もう何か月も昼夜ひっくり返った日々であったから、わたしは新鮮に驚いたりしたのである。まいにち夜つびでゲームしていて、起きるのは午後三時。それでもいちおう学校に間に合う時間に「声かけ」をしてくださいといわれていた。

いま懐かしき不登校の日々。

「メノウ、六時半だよ」

いまなら学校に間に合うよ、とこれは禁句。最初のうちは、わたしも人並みにメノウを学校に行かせようとツツパッテいたのである。

まったく目をあけない。メノウのふとんからはみ出したやせっぽちの肩をトントンとたたく。しかしこれにて朝の儀式終了、であった。ところがあの朝はすつと起きたのだ、六時半に。

ふう、わからんものだ。

「なにがきっかけになって、メノウくんは学校にいきだしたのでしょう」そらまた、きた。「二年の三学期から三年の一学期までですね、不登校だったのは。よくそんなに早く乗り越えられましたね。どうしてでしょう」

わかりません。わかりませんたら。心のなかのことですもん。じぶんの心のなかだつてよくわからないのに、子どもだからといって手にとって調べるようなことできませんよ。わからんことをモヤモヤのまんま、わからんままにしとくってことが、できんのかねえ。

そんなこと考えるヒマがあったら、あったかい風呂にはいりたい。だいたい、メノウがそこらの普通の子どもたちと同じ行動をとるものだと思えば、そもそも間違い。ひとさまに迷惑かけるじゃなし、学校にいかない、いきたくないだけほっといてくれ。

家賃二万円。六畳和室二間。台所に板敷のダイニング六畳分。風呂付。一戸建てである。トイレは汲み取り式。地方都市とはいえ県庁所在地である。荒れ果てた墓地の雑木林のほずれにある、この家は都市計画から取り残されたか。ぼつとんトイレだねえと、メノウ珍しがる。

風頭山の頂のバス停まで石段二百十段、市電の発着所正覚寺下まで三百五十段。

たえずネズミが天井裏をキュルキュルたのしげに走り回る物音とともに暮らすこの家で鍵を掛けたことがない。

東側の台所の窓の向こうは墓地に続く空き地で草茫茫々。低い石垣と溝を跨いで草摘みに忍び込む。ノビルやヨモギ、フキにセリ、ドクダミも天ぷらにすると美味しいし、うちは八百屋いらずだ。食するのはわたしひとり。メノウは食べなくなった。小さいときはなんでも食べたのに。わたしが満月の夜に寺町の墓地で摘んでくる草を食べると聞き、メノウの友達が「そいつは魔女じゃないか」といったという。

メノウ行方知れず二日目。

八時半の始業の前にクラス担任に連絡する。切羽つまったもの言いにはならなかったと思うのに（いつひよっこり帰ってくるともかぎらないし）何秒かの沈黙のうちにパニックが伝わってきた。いまの担任はまだ若いシスターだ。白いヴェールにあかるい水色のワンピースの修道服、娘のサキとおなじくらいの年齢だろうか。小柄でかわいらしい。

「お祈りしています。無事に帰ってきますように」

彼女は短い電話のやりとりのあいだに「お祈りしています」を五回は繰り返した。それから五分もしないうちに学年主任から電話が入り、警察に捜索願いを出すようにいわれる。メノウの顔写真を選ばなくてはならない。アルバムをひっくり返しているうちに、メノウの顔がどんどん若くなる。だってメノウの中学入学式のとときの顔は老人のようなもの。学ランの硬い襟のなかに埋まりそうな頭は五分刈り、表情もこちこちだ。それにくらべて小学生時代のメノウは長い前髪がひたいに斜めにたれて、ミサ仕えの白い侍者服なぞ着た日には、「天使だねえ」と感嘆の声がひとしきりであった。

キャンプに体育祭、ピアノの発表会とメノウのスナップ写真にはこと欠かない。が、千年王国の幼年時代回顧に浸ってどうする。けつきよく昨年、神学校の寮にはいったときの学生証の写真になった。

「男前だね」

いかつい顔つきに似あわず警察官のおっさんが、おきまりの聞き取りのあとに写真に見入っていった。

午後は電話のまえを離れない。メノウの部屋のなかのものでなくなっているものはないか、チェックする。

なにも変わっていないわ。

娘のサキがメノウをおいて家を出ていった十年前のあの朝のことは、忘れようたつて忘れられない。

なにやら階下が騒がしい。ベッドに起き上がって時計をみると十時を過ぎていた。昨夜夜中までひそひそ声だの、荷物を片付けているらしい物音で熟睡できなかったのだ。サキは昼ごろにならないと起きてこないと思っていたが。

ベランダに出てみると、小型トラックがフェンスにそって横づけされている。そこへダンボールや解体したベッド、テーブルなどがつきつぎに運び込まれていく。

若い作業服の男が機敏に動き、のろのろと手伝うようなのがサキのパートナーのガツちゃんだ。若い男が冷蔵庫を運んで行く。なにかも手配していたのだ……わたしの知らないあいだに。なにかにつけて、もう出ていくからといいながら一向にずるずると居続けるのか、それも嫌だなど思っていたのだが。

サキの声が、男の声と交互に聞こえてくる。

男は彫刻家だそう。たしかに風体は、パリのサンジェルマン・デプレなんぞの街角で似顔絵を描いているのが似合いそう。肩まで垂らした髪、てつだつてよれよれの汚い टीーシャツとジーパン姿。それに繊細な、といえなくもない女性的な声と細い腰。切れ長の少し鋭い目つき。

トラックには、木の幹のようなずん胴の女体が幾体も――乳房や丸い腹や尻を彫りこんでいるのでそれとわかる。それらが男に担がれてトラックに運び込まれていた。わたしには稚拙としか思えない木彫りの作品だが、サキは、有名な美術展に入賞してるんだから才能あるのよとアピールする。

階下のサキの部屋に男が転がり込んできたのは半年前のことだ。

サキとしごの妹娘、ふたりのスペースは彼女らの強引な主張で、バスルームも簡単なキッチンも付いた独立した間取りになっていた。

ともあれサキが「ガツちゃん」と呼ぶ男と、ここ半年のあいだ一つ屋根の下で暮らしていたのである。

「どうして娘が男を家に連れ込むのを許すのよ」

とわたしに詰めよつたのは木部都子、ミッション・スクール女子校の中学高校を通してのクラスメートであるから、いうことはストレート、遠慮がない。

「あんたが甘いから、あんたのうちはへんてこになるのよ。子育てにポリシーってものがないんだよね」

「そうよねえ」素直にみとめてしまう。「だけど追い出す理由もみつからなかったから。悪いことしたわけじゃなし」

「これだからねえ」つくづく呆れはてたようにわたしの顔をみて吐息をつく。にくらし。

階段の、ポーチのあたりで、わたしを呼ぶサキの声がする。

とうとう出ていくのね、あいつら。ちっちゃなメノウを残して男と連れだってサキが出ていってしまう。バカ娘。ひとでなし。声に出さずのしるのもつらい。

アツピどこお。歌うようなサキの声。わたしを呼びつけて。二階に上がってこようとはしないんだ。怖いよ。昨夜の、いやそのもつとずつと前から、三日にあげず続いていた言い争いが蒸し返されるのが。いよいよの土壇場になって。

呑み込もうとした感情が、ぐぐつと喉を締め付ける。吐き出せればいいのに、むりやり呑み込もうとするのだから。そうやって自嘲するくらいなら、放り出してやればいいのよ。あんた、なにやってんの。都子のセリフといつものまにか格闘している。情けなくもあきらめのわるい。

さんざんやったじゃないの。わめきののしり、はては懇願し、格闘乱闘きわめつき。

もういやだ。エネルギーの無駄。時間の浪費。出ていくがいいわ。さっさと出ていけ。消えろ。消えろ。

嘔きあげんばかりのマグマのエネルギーを必死で押さえる。しかしとっさにベランダから退いたのはわたしの方だった。サキの男が荷物を運び終わって玄関に戻りながら二階を、つまりわたしに向かい目をあげたからだった。メタセコイヤの樹の真下で。いくら幻の古代の樹だからといって、庭木にするものじゃないのよ。いまに巨木となって家をひっくり返すわよ、と都子はじめ周りの反対を押し切って植えたメタセコイヤである。

男とわたし、目があったのか、あわなかったのか。

「ガツちゃあん」

サキが男を呼んでいる。

もうこれ以上なにも見たくない。聞きたくない。それどころか、いまここで起こっている状況のすべてを、パソコンの画面のように瞬時にかき消せたらいい。

かれの視野にわたしは入らなかつたらう。庭のどまんなかのメタセコイヤが、腕をひろげて枝葉を繁らせているから。

ベランダから逃げ出すこともなかったのだ。なんでわたしがこそそそしなきゃならないのよ。ああ、はがゆい。サキと男は、人の目なんかおかまいなしに堂々と駆け落ちしようというのに。

どうしてくれよう。

いまは考えるのをやめよう。

コーヒーをのもう。

湯を沸かす。

テレビをつけるが見たくもない。つけっ放しにしておく。読もしない新聞をひろげる。トラックが出ていったようだ。サキの、のどかな大声。

やっぱりわたしは生来のものぐさ。いざというときにこの体たらく。けどそのようにあるのだから、このようにあるしかない。サキとガツちゃんの荷物をここで全力をあげて引きずりおろしたとて、連中が出ていくのまで止められますかいいね。

挽いたコーヒー豆をフィルターに移し、熱湯を注ぐ。

静かに泡だつように。表面がこんもり盛りあがる。よろしい。

ふいにあられもなく強烈な感情が湧きあがってきた。

憎悪。もし、ここにピストルが一丁あったなら。……だつて、まさか。いったいだれに向ける？ はは。ジョーダンのジョーよ、つてけつこうこうというのが危ないのだからねえ。

「ねえ、わたしたち、出るよお。うえにいないのお」

急ぐ気になんかなれない。おそろしくゆっくり階段のドアをあけ、踊り場からしたを覗いた。玄関の扉をあげ放したまま、ポーチにふたりが立っている。百七センチあるサキとそれより背の高い男。同じ床の上に立つのが嫌で、わたしは階段の下から三段目で立ちどまった。

ドラマは最高潮。だが、クライマックスとは、あんがいあつけないものよ。
一点凝視。

サキの目はあいかわらず半透明の薄茶色で明るい。色素の薄いのは、赤ん坊のときから変わらない。

タイルの床に立ったふたりは、揃いの細身のブルージーンズにイルカが跳ねてる白とグレイの色違いのシャツを着ている。

「お世話になりました。ドウモアリガトウ」

奇妙なアクセントで（外国人ふうの）挨拶をしたのは男のほうだ。丁寧にあたまを下げている。

こんなとき、なんと挨拶を返すべきか。そういえばわたしは、お人好しにもほどがあるとかバカにされながら、この男の作品を三十五万円で買うはめになった。個展会場でサキから口説かれ、ついスポンサー気どりは、浅ましき心根なり。しかしこの三十センチほどの女の胸像、サキよりわたしに似ていたのだ。

「これ保育園の連絡帳なの。毎日ひとことでもいいから、メノウの家での様子とか健康状態を書くことになってるのよね。はい」

学校のプリントでも渡すふうに悪びれもしないでさし出す。サキのパーマつけない髪は腰までとどきそうだし、男の鬚ものびている。どうみてもバックパッカーのカップルだ。それぞれ黒っぽい布のナップザックを肩にかけて立っている、というより植物的に地に生えているという感じだから、緊張の二字には無縁である。徹底的にリラククスしている。ずっこけるよね、まったく。

「じゃね、メノウをよろしく。保育園のお迎え五時だからわすれないでね」

なにが忘れないでね、よ。買い物リストじゃあるまいし。憤然たる思いであったが口には出さない。サキも昨夜の激烈な言い争い、わめき叫んだヒステリー発作はウソのようにもの言いはしずかだ。

「おちついたら手紙かくよ。アッピもかいてね。じゃあ時間ないから行くね」

まるで、ちょっとそこまで用事があるから子どもをみてね、というふうだ。

「ちょっと待って。メノウにはちゃんと話してあるのでしょうかね」

「話したよ。きのうも、けさも」

「なんていったの」

「サキはお仕事でインドに行くから、きょうから保育園のお迎えはアッピだよ、って」

「メノウはなっとくしたの」

「うん。すこし泣いたけど。大丈夫だよ。あの子、アッピのこと大好きなもの」

「そんな問題じゃないでしょ。置いて行かれたとわかったら。ぞっとするわ」つい口走ってしまふ。

サキの体がわたしの言葉に反応して硬くなったのと、ガツちゃんが、つとサキの肩を抱き寄せたのが同時だ。

「いろいろゴメンナサイ」

いつだってうつらうつらしているような、捉えどころのないガツちゃんが肩をすぼめていう。そして、あろうことか一歩わたしに近づくと、これ以上優しい仕草はないというふうに、わたしの背中を両腕で包むように抱擁したのだ。

う、と出鼻をくじかれた態のわたしは、やけっぱちでかれの背中を叩いた。サキよりもわたしの歳に近いんだわ、こいつ。この男を目の前にしたら横面を張り倒してやるわ、と都子にそのかさされて息まいていたのに。

「新幹線に乗り遅れるよ」サキのいくぶん尖った声に、ガツちゃんはわたしから離れた。

荷物はひとまず仙台の友人宅に預かってもらおうそう。うちに置くのをわたしが拒否したのだ。

インドに発つのは四日後だと。

「さよなら」ふたりが声をそろえていった。

風のようにふたりは消えていった。いや、去らせてしまったんだわ。おそろしく上手な消え方だった。ちきしよう。迫力のないつぶやきにしかない。あ、メノウの保険証はどーする？ そんなもの、今、心配しなくていいじゃないのさ。

階下の、サキとガツちゃんが使っていた台所も六畳の部屋もガランドウ。なにもかも運びだされていた。窓際にメノウのおもちや箱と着替えの入った衣装ケースだけが残されていただけ。

べにしまめのう。

べにしまめのう。

二個のケースのおもてにマジックペンで、名前が描いてあった。

そしてまったく思いがけなかったことに、目から涙があふれ出るとまらなくなったのだ。わたしは憤怒の塊と化していたはずなのに。

あの日の夕方、保育園迎えの五時。

飛び出してきたメノウは、くつ箱の前に立っているわたしを見るなりちいさな体を固まらせた。

「サキはあ？」

きたな。いつものかん高いメノウの声ではない。押し殺したように掠れている。

「サキはねえ、インドにいったの。メノウも知ってるよねー」

歌うように流したつもりだったが、メノウの顔はいまにもくずれそうにクシャクシャになってる。

「だいじょうぶ。すぐ帰ってくるから、アッピッピとお留守番しようね」

「やだ。サキがいい」

そこへ、

「メノウくん、ちいちゃんのご門のところまで待ってるよ。メノウくんにさよならしたいって」とマサコ先生のひと声しめた。

メノウは園の門めがけて保育園の庭を駆けていく。

「だいじょうぶそうだわ」

「メノウくん、さすがです。おひるねの時間に、なかなか寝つけなかったんです。おかあさんがお迎えに来てくれないかもしれないって心配で。でも、いつのまにか眠って、起きたらおやつがメノウくんの好きなマンゴープリン、おおよるこびでしたよ」

マサコ先生が、キリンのアプリケをした下げ鞆を手渡してくれる。

なにがさすがなのかと思ったが、追及はしない。ただでも至極、変わった家族と思われるているのだ。

メノウがサキ、ジュン、アツピピと呼ぶ人物達が、それぞれメノウの両親、祖母であって、父と母は離婚しているらしいが、父親の淳は週末になると保育園に現れてメノウをじぶんのアパートに連れ帰る。だから月曜日には、淳に付き添われてメノウは登園する。という家族関係を園のほうでもようやく呑み込めてきたようだ。しかしまた「ガツちゃん」なる怪しげな男が登場し、お迎えにきたりするので混乱している。

「ガツちゃんてだあれ？」マサコ先生がメノウに訊いたらしい。

「サキのおさかな」と答えたそうなの。

メノウは詩人だ。

「メノウちゃんのやさしさってね……うまく説明できないんですけど、とてもすばらしいものです。こころの根っこところが信頼、なんです。両親そろって問題のないような家の子が、人間不信でいじけていたりして、どの子にも身につけているものじゃありません。メノウくんのおかあさんとの関わりも、世間一般から見ると変ったかたちになるかもしれませんが、わたしは、おかしいとは思いませんよ。サキさん、勇気あるわ。すてき」

めったにこんなことしてくれる人はいない。

子捨て女に世間の風あたりはつよいぞ、サキ。

「みてください。メノウくんのおの天真爛漫な笑顔。きちんと愛情を注がれて育っている子どもの笑顔です。メノウくんのためによりすばらしいところはねえ……どんな人とも動物とも、木や石ころとでも……差別なくかわれる心のしなやかさ、なんです。天性のものかなあ。宝ものですよ」

メノウの天真爛漫。

宝ものですよ。ほつほ、どんなもんだい、泣けてくる。しかしもうひとことがあった。

「思春期に入る頃、なにか出てくるかもしれないませんが、そのときそアツピピさん、デーンとかまえて、しっかり受け止めてあげてくださいね」

マサコ先生、メノウの十年後を予言する。

「きょうはさあ、海にでて、きれいな貝ひろってキャプテンズ・カフェでごはん食べてかえろうぜ、メノウ」

「うっほん」

メノウにとっては豪華なメニューだ。

『キャプテンズ・カフェ』は保育園の帰り道、どうしてもまっすぐ家に帰りたくない日に、メノウとわたしが一杯やる場所だ。ヨット・ハーバーを見下ろす、海に突き出したマリーナのレストランである。相模湾のかなたの山なみに夕日が沈むのを眺めながら、わたしは白ワイン、メノウはメロンソーダを飲む。

「ねえ、サキはあ？」

ひとしきり海辺で砂ダンゴを作ったり、波と追いかけてごっこして遊んでいたメノウが、思い出したように叫ぶ。

「サキはインドよお」

わたしはソプラノでアリアだ。

潮風からだがひんやりして、半袖シャツにバミューダ・パンツではすこし寒い。泣き顔になつてるメノウをほおつておいて、サンダル片手に裸足でパシヤパシヤ波をけとばす。あしの裏から潮が引いて、こそばゆい。

「サキがいいよお」

また動かなくなつてる。こんなときは、まず視線を移動させるのだ。

「トンビがメノウのパンをねらつてるよ。みてみて」

おやつ菓子パンをかざしてみせる。

このあいだ公園でおにぎりを食べていたメノウは、低空飛行してきたトンビに目にもとまらぬ速さでおにぎりを攫われ、大泣きしたのだ。

「やだあ。サキがいいよお。サキはあ？」

のってこないな、こいつ。

「サキはいないの」すこしめんどくさくなってくる。

「どうしてサキはいないの」

「だからインドに行ったっていつてるでしょ」

「やだあ。サキばかりずるいよお」

「ほんとだね。わたしもそう思う」

「ねー、ぼくもいくう。ぼくたちも行くうよアッピーピ」

「そうねえ。いっちゃんおうか」

「うん。はやくいこ。すぐいこうよお」

「いますぐなんてムリなの」

「ムリでもいいよー。すぐいくう」

「あんたききわけのない子ね」

「やだ。アッピーピのケチ」

海風でからだを冷やしてしまったらしい。

メノウが風邪をひいて高熱をだした。

真夜中の二時。ひゆうというみような息づかいに目がさめた。

となりのベッドに寝かせていたメノウの顔が真っ赤に火照っているのにびっくりして熱をはかると三十九度六分もある。シロップの解熱剤をのませようと抱きおこしたがぐったりして目もひらかない。頭をわたしの肘にもたせかけ、半開きのくちびるに小さなスプー

ンを持つていくが、シロップはこぼれてしまう。なんか様子がおかしい。不安になってメノウ、メノウ、とからだを揺さぶるとパチリと眸をあげ、突然しゃべり出したのだ

「アッピッピ、木を食べちゃいけないんだよ」

「え。なにいつてるの、メノウ」

「木を食べちゃいけないの。だんだんまわりがひろくなって木がさびしいの」

熱に浮かされてるんだ、この子。

「食べたりしないから。木なんて」

「どうしてそんなにこわいかおするの」

「メノウ、わたしのカオ、こわい？」

メノウの眸が天井の一点をみつめて、キラキラ耀いた。頭をぐっとのけぞらせ、その表情といったら、うっとりというか法悦、というか。とにかく尋常ではないのであった。わたしは金縛りにあったように身動きならず、われに返ると、メノウは何事もなかったように眠っていた。

メノウの変容。

あんなことは二度と起きなかった。死んじゃうかと思ったよ。しかしあの一瞬、死んだのではなかったか、メノウは。

《雪の下で夢を見ている種のように、あなたの心は 春を夢みる。
夢を信じなさい。永遠の門はそのなかにこそ隠されています》

カリアル・ジブランはわたしがじぶんで発見した詩人ではない。短大の英文学のテキストだったのだ。

出会いはたぶんこのように他愛ないもの。

ところで。

アッピッピとはそもそもものだ？

アッピッピとは、わたしのことである。

なぜ、幼いメノウがわたしのことを呼ぶのにアッピッピなる音声をもつてしたか、皆目わからぬ。なぞにして神秘である。

娘のサキは、じぶんのことをおかあさんとも、わたしのことをおばあちゃんとも呼ばせなかった。メノウの生まれた年のわたしは四十九歳。おばあさんなんて呼ばれたくなかった。子どもっぽい奴といわばいい。わたしにはやりたいこと、やるべきことがあるのだ。孫のお守りをしている暇はない。マゴマゴしてらんないわ、と嘯いていたものである。

そのわたしがメノウを手許において、二度目の子育て。

おお、人生はかくも意外性にみちている。

サキだって最初からメノウを産みっぱなしにしていたのではない。メノウが一歳の誕生日を迎えるまでは、文字通り『母性のめり込み期』だった。朝から晩まで赤ん坊のことに

夢中。おっぱいもありあまるほどでミルクタンクを自称し、二歳すぎまでたつぷり母乳を吸わせていたのだ。

なんせメノウ出産の際に、分娩室から聞こえてきた産婦の喚き声は病院中に響きわたり語り草となったほどだ。わたしが産院に駆けつけると淳が、「男の子でした」と顔を上気させていた。淳は分娩に立ち会ったのだ。

「感動しちゃったあ。つるんととび出してきて、産声きいた途端、わあわあ泣いちゃった担架にはこぼれて病棟に戻るサキはエレベーターのなかでにんまりしていた。

美術学校に通っていた十九歳のサキから、妊娠をうちあけられたときは動転したが、人はできちゃったから結婚するよ、とけろりとしている。高校のクラブの先輩であった淳はよくうちにも遊びにくる顔なじみだ。真つ黒に日焼けして、眉と眸のくつきりと濃い淳を、わたしも気に入っていた。無口な男だけれど、電気器具の修理や簡単な大工仕事なんぞをもくもくと片付けてくれた。

「淳ちゃんおムコにきてくれるのね」
わたしは歓迎した。

しかしふたりが自立した家庭を持つにはあまりに若く幼なすぎる。淳は住み込みで小規模の動物園の動物を飼育していた。小さな生き物の世話はお手のものだ。週末にはサキと赤ん坊のメノウのいる逗子のわたしの家にやってくる通いお父さんになった。手先のめつぽう器用な淳に、おむつ替えはもちろん、沐浴、湯ざましを飲ませたり離乳食づくりと、おっぱいをあげるほかは、かなうものはいない。

さて赤ん坊の名前である。

淳とサキは「誕生石の瑪瑙ってカッコいいよね」とはしゃいでいる。だいぶ我慢はしていたが、

「小学生になって、瑪瑙なんて字を書くのはたいへんよ。それに、凶の字が入るのはよくないわ」と口を出す。

「でもね。石言葉はいいんだよ」

とサキがひらいて見せたのは『宝石ことば―誕生石のメッセージ』という本の瑪瑙の項である。

「二酸化マンガンなどの鉱物が、風景模様のような縞模様を浮かびあがらせ、絵画のごとき宝石となっている。自然の創った芸術品である。芸術を志す人のお守りといわれている」

とある。サキは得意気である。

「女の子だったらめの子。だっぴと女の子だっぴといわれてたのよ。生まれた途端、男の子ってきいてびっくりしちゃった。漢字がよくないならカタカナでいこう」

で、「紅島メノウ」のできあがり、なのだった。

3

都子が鷓沼から湘南バイパスを、車飛ばしてきた。

「なんでサキちゃんをとめなかつたのよ。ハハオヤでしょうが。なさけないわね」

「さんざんやったわよ。知ってるでしょ。結局責められるのはわたしだなんて、割があわないわ」

「しょうがないね。あんたも同じようなことしてるから」

「同じじゃありません。わたしは子どもを渡してもらえなかったのだから。それに五年後にはみんな引き取ったわ」

わたしはムキになつて抗議する。

「わかってるよ。あんたのリコンのいきさつくらい。ところでサキちゃん、インドでなにしてるの」ぐつと話題を変えてくる。

「アシラムに住み込んで日本食のレストランを仕切っているんだって」

「ふうん。アシラムって瞑想道場なんだよね。そこで賄いやつてるのか。なんでメノウちゃんをつれていけないのよ」

「子どもは瞑想の邪魔だからアシラムには入れないんだって」

「あんたよくそげん所に娘を行かせたねえ。氣い狂っちよる」

都子は興奮してくると、どことも知れぬ(たぶん転勤でよく移動したからだろう) 日本列島あちこちの方言がいきりまじった、へんな日本語が飛び出してくる。

「サキとは日々是鬪争だったのよ。血をみるくらいにね。もう万策つくたわよ」

ほおとわたしは、ろっ骨にひびくような溜息をついてみせた。こういったこと、たとえ都子にでも喋りたくない。娘との、ハラワタ引きずり出しあうやりとりなんぞ。思い出したくもないのだ。

「ま、しゃあないね。こうなったらサキちゃんは病気と思つて腹を据えて、あんたがしっかりメノウちゃんを育てなね」

都子はじぶんがいい聞かせるふうにおかっぱ頭をこくと振った。都子のスタイルはここ数十年と変つてない。すこし受け口の厚めの唇に、濃い口紅を塗っているのが椿のはなびらみたいだ。おかっぱ頭と特別おおきい真つ黒な瞳のせいで、国語の教科書の歌人与謝野晶子にそっくりといわれていた。

「あ、都子白髪いっぽんみつけたよ。わあ、キラキラひかつてる」おもわず口に出してしまった。とたんに都子がバクハツした。

「あんたになによ。メノウちゃんがかawaiiそうじゃないの。ひとの白髪なんか数えてる段か。まあだおんぶに抱つこの歳でさあ。荷物みたいに置いていかれて」わあわあわあ。大きなびっくり眼から大粒の涙がころがり落ちる。五十を過ぎた女が憤怒の形相でしゃくりあげるの図。「もうやだ。あんたたちイタリアでもアメリカでもいいからさ。いっついで。あの子の泣く顔みたくないよ。ばかばかあ。ロンドン動物園でゾウでもキリンでもカバでも見せて気晴らしさせておいでよお」

わけのわからんこといいだして。イタリアにロンドン動物園があるか。

「それでサキちゃんはいっつ出で行ったの」

「ちようど一週間前の七月七日」

「ふうん、逆さ七夕やねえ」またわけのわからんことをいう。

「イタリアに行くわよ」とわたしは宣言した。インドになんかいくもんか。やけっぱちである。

飛行機はモスクワ経由のミラノ行きだ。一日も早くと格安のチケットを探したら、七月十五日のこの便しかなかったのだ。

やたらに気がせいって一週間待つのが限界だった。さいしよはメノウだけを連れていくつもりだったが、五分と同じ場所にじっとしていかない小さな子どもを抱えての海外旅行が、さすがに不安になってきた。若い母親のような体力はない。空港で駅で、メノウが眠ってしまったら抱くかおぶうかしなくてはならないし、わたしがトイレに入っているあいだ、メノウをどうする。

おお、淳ちゃんがいたじゃないの。

メノウの父親、サキの別れた元・夫を引っ張り出すことを思いついたのだ。離婚届はサキの強引な説得に負けて出したものの、はしやぎまわってインドから帰れば気がすんで、じぶんのところにもどつてくると信じ込んでいるようなのだ。淳のメノウを可愛がること、子袋のついたオスのカンガル―であった。

わたしはすぐさま、旅行会社に電話をいれ、アエロフロートの格安チケットを三枚、予約した。

淳の仕事先に電話するのは初めてだった。

「あ、おかあさん。おひさしぶりです」

そうか。かつてわたしは、このひとの義理の母だったのだな。三年二か月の間だったけれど。なつかしげな元義理の息子の声に他愛なく感動してしまう。

「淳ちゃん、急な話なんだけど二週間くらい夏休みとれない？ メノウをイタリアに連れて行くの。一緒にいってくれないかな」

「は。イタリアですか」

「じつはもう、チケット取っちゃったの。淳ちゃんの分もよ。サキばかり勝手なことして癪じゃない。行こうよ、行こう。あのね。イタリアのトスカーナ地方の丘のうえに友達一家が住んでるの。ミレーの『晩鐘』って絵、知ってるでしょ。そっくりの風景のところよ。小さい子どもたちもいるし、いつでもおいでっていつてくれるから、メノウとのんびりイタリアの田舎暮らしをしてこようと思うの。どう？」

ほとんど脅迫だ。

とにかくこの際、なにがなんでも淳を引っ張っていかなきゃ。

「はあ、それは行ってみたいですけど」

唸っている淳になおも迫る。

「ホテル代はいらぬし、航空券はわたしがもつわ」

この頃のわたしは景気がよかったのだ。父の遺産の株の配当は、バブル経済の崩壊まではすこぶる潤沢であった。

「やすめたとしても一週間ですけどそれでもいいですか」

「もちろんよ」

成田空港で、淳と落ち合う段取りにした。

メノウを残してサキが出奔してから一週間しかたっていない。とにかくじっとしていられなかったのだ。エネルギーは不完全燃焼させない。滞ったら動く。そうしてそんなとき汽車でも電車、バスでもなんでもいい。乗り物に乗ってうごく。これがわたしの行動パタ

ーンなのである。というよりわたしの生きるすべなのだ。いいとしをしてフラフラしなさんなど中学時代からのおんな友達はいうけれど我慢できない。

言葉もろくに通じない国の、安ホテルに滞在し、海が近ければ海辺を、山に囲まれていれば行けるところまで登ってみる。とにかく歩く。街を森を丘を。それだけだ。街なかの気に入ったカフェで、一日じゅうポケっとしていることもある。宿泊施設のある修道院や僧房を見つけて泊るのも、在俗出家者の気分。そもそもわが人生のはじめから、この世のこともにまるきりコミットしていなかった。いやコミットしたくともなぜだかほんとはできないのよ。そんなふうになれついでる、としかいえない。生まれつきの隠遁生活願望。とはいえコーヒーや葡萄酒がのみたくなったら巷に降りる。ようするに気ままなひとり旅。めんどくさいので同伴者はいらない。とはいえ今回はそうはいってられない。

「あんた、ほんとに帰ってくるんでしょうね」

わが保護者のおんな友達都子がいう。

「たぶんね」

「たぶんじゃ困るのよ」

彼女のいうには、風の吹くまま気の向くまま、好き勝手にほっつき歩くわたしが野垂れ死にしようが砂漠のミイラとなり果てようがかまいはしないが、

「メノウちゃんがいい迷惑よ。あんたの遺伝子DNAにインプリントされた野性的本能的衝動に振り回されて、インドかイタリアか知らないけれど、飛行機だの電車だのバスに何時間も押し込められてホテルからホテルに移動する暮らし、小さい子どもにはよくないよ。子どもには子どものリズムでゆっくり歩く速さが、心にも体にもいいの。わかった？」

ハイわかりました、とわたしは頷く。この頃の都子は「わかった？」が口癖になってきたな、と思いつながら。

「あんたにねえ、しつかり言っとかなならんことがある」

「なんね」わたしまでへんな日本語になる。

「今の、このおかしな世の中で、いちばん元気なのは、ばあさんなんよ。つまりあたしらってこと。なんせ戦時中は食べ物ないから芋や粉ねってスイトンつくって食べたよね。防空壕を庭に掘ってさ。どんなんだって生きぬいてみせる。じいさんはもうよれよれ。高度成長期に働き過ぎて死にかけよるわ。だからね、いたいのは子供たちをまもるのはわたしらだよ。メノウちゃんをしつかり育てなよ。わかった？ それにさ、メノウちゃん、守人くんの生まれ変わりみたいな気がするっていったじゃない。そうかもしれんよ」

「生まれ変わりか……よくわかんないわ。そんな気のすることもあったけど
わたしの声のトーンが一瞬暗くなったからだろう。都子がわたしの背中をどんと小突いた。

「わたしもできることは協力するからさ」

「うん、ありがと。じゃ、都子もいっしょにイタリアに行かないか」

「わたしが旅行嫌いなもの知ってるでしょ」

「移動拒否ね」

都子は母港型、定着型の女なのだ。

もつとも彼女の場合、じぶんは医者の女房として安全地帯におっとりとかまえ、冒険のリスクは負わずしてわたしを唆し、あんた破茶滅茶ねえなどと面白がっているのだ。ずるい。

I

一九九五年七月十日。

あの日、わたしは墓参りにゆくはずだったのに行きそびれてしまった。長男守人の命日だったのだ。明日にしよう。あしたメノウと一緒に鎌倉霊園に行こう。保育園は休ませればいい。

「夕方五時よ。保育園に迎えに行くの。忘れないでね」

サキが出がけに念を押していったことだ。よくいうよ。

そう、メノウをわたしのところに置いて、男と出奔しようっていうときに。

夕方五時にメノウの「おむかえ」に小坪保育園にむかいながら思ったのだった。なんでサキはわざわざ選んだかのように兄の守人の死んだ日に家を出てゆくことにしたのだろうか。

子ども達の父親の許にいた守人と、六年ぶりに再会したのは、東京駅は新幹線のプラットフォームである。守人高校三年の夏休み、大学受験の下見をするため上京させるが、「ついてはおふくろに会ってこいというてあるけん」おまえも会いたかろうから連絡をとらせよう。というもと夫、結城大輔のご託宣である。しかしわたしの実家、笹島家に泊ることはならぬ。はじめである。守人の宿泊先は東京タワーの下のホテルに予約してあるそうなので。会うのはホテルのロビーにしてほしいとの条件付きである。なるほどね。あのひとらしい。八月九日は、博多発八時半の新幹線に乗ってゆくが出迎えはいらぬ。ホテルに到着したら電話をいれるので待機しておれという。もと旦那の九州男児ぶりはよくよく承知しているが、息子のほうまで世襲してはおるまいねと、一抹の不安があった。しかしそのほうは杞憂であった。出迎え無用といわれていたが無視、わたしは「のぞみ」号に電話をいれ、守人を呼び出してもらった。別れていた高校生の息子と六年ぶりに会うのです。迎えにきているとは知らないのです、ホームで待っていることを伝えたいのですと客室係に訴えたのだ。モシモシとあいづらしいくもった声が聞こえるまでの時間はほんの四、五分だったのに耐えがたい長さだったよ。

「守人お、わたしよ、おかあさんよ（これがぎこちないのだ）聞こえる？ 降りたところ待っててね。いい？ わたし、さがすから」と叫んでいた。一拍おいて守人の返事がかえってきた。

「迎えにきよるとね」

まのびしてゐるわねえ、やっぱり。

よくしゃべるけれど、どこかワンポイントずれる子であったのだ。

わたしにしてもホームに降りたった人ごみの中から、白シャツに学生ズボンのステレオタイプな高校生姿を探そうとしていたのだから大輔さんのことはいえない。いない、いない。守人がいない。パニックになりかけたところで、金髪の逆立ったヘア、黒の半袖のシャツのそでを肩までまくりあげて、金属の鎖のような輪っかのようなんがジャラジャラぶらさがっているベストに黒パンツ、といういでたちのパンク少年がひとの途絶えたホームの柱に、ちよつとポーズをつけたふうに凭れているのを見いだしたのであった。わたしも負けてはいない。髪は腰近くまでストレートで。麻の生なりのベスト・スーツ。スカートはボデライインに沿ったロングである。負けてない、でしょう。

「も・り・と？」

わたしが小学生時代の守人しか知らないように、守人の記憶のなかのわたしも二十代の終わり、若い母親のはずだ。十七歳だよ、守人。

見つめあい、瞬時に確かめあった、お互いを。恋人同士のように。

「コーヒー、飲む？六本木に出ようか」

「いいね」

守人がほんとうにコーヒーを飲めるのかどうか、わからなくてちよつとドキドキしていたのだけれど。

地下鉄に乗り、ホームを階段と一緒に歩く。

守人とわたしの蜜月のはじまり、もつともあつけなく終わりを告げたのだけれども。

守人はよく交通事故にあう子だった。あの子が三歳のとき、赤ん坊のサキを抱いて横断歩道を渡っていたわたしを追って、あとから父親と手をつないでくるはずの守人はとげざん駆け出して右折した車にはねられた。あつという間のできごとで、おおつ、という大輔の叫びに振り返ると守人はひっくり返っていた。ボンネットからマリのように弾んで落ちたように見えた。大輔はいった。肘と膝の打撲だけで怪我らしい怪我がなかったのは、幼い子供のからだは弾力性があるということらしい。救急入院したものの本人は「ぼくね、自動車にはねられちゃったの」とけろりとしていた。

二度目は自転車に乗ってた守人が、暴走してきたボルボにはねられ自転車ごとすつ飛んでガードレールに激突したという、命が助かったのが不思議なほどの事故だった。再会して一年はたっていただろうか。

事故の知らせは元夫の結城大輔からだった。守人の学生証から身元が判ったのだろう。

「すまんがすぐ京都の病院に行ってくれないか。仕事がぬけられ次第、おれも行くが。京都の宿は手配しておく」と連絡が入った。落ち着いているのかパニックしすぎているのか非常に事務的な物言いである。

「三十五針縫ったがいのちには係わらんそうだ」

加害者の青年は、親から買って貰ったばかりのボルボを二百キロで飛ばしていた十九歳のK大の学生だという。親が病院に付き添っているとのこと。要件のみの電話だった。

最終の一本前の新幹線にまにあつた。雨のなかを病院の玄関の前にタクシーをつける。中年の男性からさつと傘をさしかけられた。わたしはおそらく結城差し回しの会社の部下かなんかだろう、と思い「あら、わざわざすみませんね」などと挨拶したのだ。ひじょうに腰の低いひとで、たえず気を遣ってくれてエレベーターから病室まで中腰になったままである。はつと気がついたのは病室のドアの脇に並んだ青年とその母らしきひとが、「このたびはまことに申し訳ないことをいたしました」と深々と頭を下げ、くだんの紳士とともに最敬礼をしたところで、であつた。

ベッドの守人は全身包帯すがたで真つ白け。顔半分も包帯で覆われ、昏々と眠っていた。真夜中に近い時間で当直の医師がくるまで看護師長が怪我の状態を丁寧に説明してくれる。気さくなおばさんふう。

「意識ははっきりしているのでしょうか」つまり頭をやられていないかが気になったのだ。

「だいじょうぶとおもいますよ。いまは麻酔で眠っておられるけれどそろそろ目が覚めていい頃です。呼びかけてあげてください」

といわれても、すぐに声がでない。相手は白装束で、かろうじて包帯からはみ出た片目も、しつかり閉じられている。

「結城さん。ゆ、う、き、さあん。聞こえますか。このかた誰だかわかりますかあ」めつぼうほがらかな看護師の声に守人がうつすら目をひらいた。

とても返事ができないだろうとおもえた包帯ぐるぐる巻きの守人が、

「あ、な、た、わたしのおかーさん」

しゃがれていたがのどかな返事の仕様だ。看護師がふあふあと笑いながら、

「いつもこんなですか」という。

「まあ、だいたいこんなです」

「ふうん、ひょうきんね」

部屋の片隅で加害者の親子がひっそり笑いをこらえていた。

今日は明日につながっている。昨日も今日につながっているということがわからなくなつたあの夏。わたしは一日じゅうテープをまわしていた。タイトルは「呼吸困難」。えらく暗い曲名ね、といったら守人は、

「いい曲だよ。きいてよ」といった。

彼がつくつた自作自演の曲だ。ギターはバンドのギタリスト、周さん記号である。こんな歌詞なのだ。

〈すきまから洩れてるまぶしい光で 窒息しそうだ呼吸困難 せまい檻に閉じこめられて
きみのくちびるをさがす

ねむたくなるまで時間かせぎは あてもなくレコードあさり ひるまの風をあこがれて
きみにつくつたテープならしつづけて夜があける

コキュウコンナン コキュウコンナン

からだの裏側から通りすぎる音のかけら 放り出されたゴミくずにうもれてしまうように
コキュウコンナン コキュウコンナン

背のびばかりしつづけて歩くときえできない

(ひるまの風をあこがれてーからリフレイン)

ノドの奥からかわきかわき きみの名も声にだせない

コキユウコンナン コキユウコンナ

コキユウコンナン コキユウコンナン

コキユウコンナン コキユウ コキユ…:…:コ

はじめて聴いたときにはなんだかぼそぼそ独り言いつてるみたいなの、めりはりない音楽ねえと思つたが、くり返し聴くうちにそのまのびのした感じがとても好きになった。

この曲をはじめてライブにのせるとき、守人が九州から電話をかけてきて、真紅の口紅を三本送ってくれという。ステージで使うのだと。

「おれさあ、ひとりで化粧品屋入りにくいんだよね」

「わかった。まかしとき」

わたしはおもいきり派手なバラ色の口紅を送ってやった。

II

守人が死んだ日は、朝から雨が降っていた。昼すぎにはあがつていただけけれど。赤坂の母のマンションにいった帰り、銀行に傘を忘れてきたからよく憶えているのだ。ベージュ色のごくあたりまえの傘だったのも特別のここのようにハッキリ憶えている。青山一丁目の高層ビルの窓ガラスに映った夕雲にオレンジ色の光がきらめいていたからあしたはお天気だなんて思ったことも。晩ご飯のメニューを考え、ピーコック・ストアでトリの骨付きもも肉を四本買った。干しプラムとワインで煮込むのだ。それにピンクと赤のインパチエンスの小鉢を三個、ベランダに置こうと買い求める。ちよつと荷物になるけど真夏の花はけなげなのがいい。品川から横須賀線にのれば五時半には逗子に戻る。それから。

午後九時をすこし過ぎていた。

わたしは台所で洗い物をしていたので、中廊下の電話は高二の娘のサキが取った。突然の、かんだかく泣き叫ぶ声。

「うそ、うそだあ。おにいちゃんが死んだなんて！」
だれが死んだって？

なんととつさに思いうかべたのは九州のもと婚家の、もと姑、子どもたちの祖母であった。ほんの一秒の半分の間。主語は耳にはいつていたはずなのに聞かなかつた。おにいちゃんが、おにいちゃんが死んだって、としゃくりあげる娘にどうしたのよ、誰から電話だったのよと問い詰めた。

洗いかけの皿が音たてて床に落ちて飛び散つた。

子ども達の父親からの電話だった。すぐ切れてしまったという。いま警察にいますといったと。

守人が福岡の、かれが住んでいたマンションの九階から転落死？ 飛び降りだと知るのは何時間かあとだった。いや飛び降りた、というのは正確ではない。かれはバンドの連

中三人とビールをのんでバンドリーダーの守人が編集して、出来上がったばかりのテープを聴いていた。そのテープには「呼吸困難」のほか、「ぼくはコトバ、うそばかりついてる」「シー・ワズ・ノット・ア・ロンリーウーマン」など守人が作詞作曲した曲、それにバンドのボーカルやドラムのメンバーと詩をつくった「へびとりんごの木」などがはいっている。みんな高校時代の仲間である。そのうちのひとりにはバイトがあるからと帰り、のっぽで色白のボーカルのカマタくんともうひとりが残って雑誌をみたりネコをかまったりしていたらしい。

守人はいつもするように、玄界灘からの潮風をうけ最高の夕涼みと称して九階の窓枠に内側を向いて腰かけていた。

「カマタ、ミミはお前にやるよ」

うん？とコミック雑誌を読んでいたカマタくんが顔をあげると、守人がニコツと笑った。と、おもったらすつと視界から消えたというのだ。ミミは、守人がオレの美女ネコといつてかわいがっていた三毛猫である。

窓枠につかまっていた手を離したただけだったから、そしてちよつと体重をずらせたのだろう、うしろ向きのままふんわりと消えたのだ。飛び降りなら前のめりになる。カマタくんの眼には、『不思議な国のアリス』にでてくるチシャ猫みたいに、守人のニコツ、という笑いだけが宙に浮いて残った。

しかし残ったのはチシャ猫の笑いだけではない。守人ったらあっちにもこっちにも約束をしていたのだ。九月のライブの打ち合わせにライブハウス「そろもん」のマネージャーと翌日の三時。二日後歯医者予約が午後四時半。夕方六時にビリヤードに行く約束をしたのはアビルババという名前の謎の人物。守人の手帳に書いてあったのだけど、男か女か、どこの国のひとなのかまったくわからない。いちおう守人のバンド仲間や元クラスメートたちに聞いたがだれも知らない。こんなことでもなければ、息子の手帳や日記をあらためるなんぞありえないはなしだ。いちばんショックだったのは当日六時にデートの約束をしていた女の子みなみちゃんだったろう。親不孝通りの喫茶店で、待てどくらせど来ぬ守人は地上から消えていたなんて。おおいやだ。

いやだ。いやだ。こんなんいやだ。うそようそようそよ。

いやだ。いやだ。こんなんいやだ。うそよ。うそよ。うそよ。

ひと晩中わたしはクッションを投げ続けていたような気がする。叫びながら吠えながらソファといわず壁といわずピアノにライティングビューローに本棚に、全身全力をあげて投げつけた。十畳はあった応接間をびよんびよんとびまわり。ひとがみたらたぶん、悲しんでいるようには見えなかったろう。憤怒の火の玉にはみえても。

ぬいぐるみのクマを抱きしめたサキが泣きに来た。荒れ狂う母をみてそつと二階に引き上げていった。ドアのところ、

「おかあさん、わたしがいるじゃない」とだけいって。

なんたって二週間前の電話だ。

ライブはうまくいったの、ときくと、

「いちおうよかったっていわれたよ。おれは満足してないんだけどね」と元気がないっていうか、異様にくぐもった守人の声だった。なにかあったね。

「テープ送ったオーディションに落ちたんだ」

「めげないめげない。このつきがあるでしょ」

「おれが四人いればいいのになって思うよ。連中やる気ないんだ。っていうかおれのほしい音をだしてくれん」

ふう。けっこう傲慢。あんた才能に自信あるんだね。

「天才でなきゃ、死んだほうがましだ」って、いつてくれるじゃないの。苛立っているよ。うでもあるし、もうどうでもいいってふうな荒涼とした心風景がズームアウトする。

「だいじようぶ、だいじようぶ。守人、才能あるよ。すべてオーケー。無駄なことってないんだよ、人生には」

「悟ってるね、おふくろさん」

「でもないけどね。ずっと音楽やっていくつもりなの」

「わからん。このメンバージャやむりだ。もう就職活動はじめてるのもいるし」

「お父さんはなんていつてるの」

「もう病院を継げとはいわなくなった。諦めの境地だね。ジャンバラヤはメシの種にはならんぞといってるけどくに反対はしないな。弱気になってるね。酒につきあうとめっちゃ嬉しそうなんだ。おれ、親父の稚児さんみたいな気分になるよ。小遣いたっぷりもらって」

「へえ。まあ、たまにはいいでしょう」

「おれ、ずんずん墮落していくのかな」

「そんなことないよ。ね、鎌倉にきなよ。サキもよろこぶよ」

「親父が可哀そうになるんだよな。おれまでおふくろのところに行ったら」

そうか。守人はなんて優しい子なのだろう。わたしは元夫の大輔にちよっぴり嫉妬を覚えてしまう。

「おれ死んだらどうする」

ふいに守人がこともなげに訊いた。

「あー、もう、天才少年死すってモニュメントたてよう。あんたのつくった音楽一日じゅう鳴らして等身大の写真飾って。守人よ永遠にってね」

「どうやって死ぬのがいちばんらくかなあ」

「わたしなら飛び降りだな」

無言。ちよっと。まさか本気。わたしはあわてた。

あんたねえ、しっかりしてよ。死んだりしたら承知しないから。

「ジョーダン、ジョーダン。心配すんなって」

行ってこようかしら守人のとこ。なんか心配なのよね。

ぼろりとこぼしたのは夕食後の、つけっ放しのテレビの前からサキがいつまでたっても動こうとしない。それも気になってたからか。つい口をついて出てしまった。

「やめてよ、おかあさん、おにいちゃんいくつと思ってるの。二十一だよ、保護過剰。それにあたし、来週から期末テスト、始まるのよ」脅迫である。あたしのご飯、だれがつくってくれるの、というわけね。

福岡ゆきは断念、した。

翌朝一番の飛行機で福岡は柳川に向かい、旧家の造りの結城家の仏間で守人と対面した。父親の結城大輔が遺体の白布を外し、「おふくろさんだよ」と押し殺したような低い声でいった。まったく傷のないきれいな顔だった。

守人は結城家の跡取り息子、わたしの元夫の姓をついでいたから葬儀も結城家によって仏式でとりおこなわれた。

すべてが額縁のなかの出来事のように。静けさのなかで動く絵だ。喪服姿のかつての義理の弟妹たちとことば少なげに挨拶をかわす。なにひとつ現実味がなかった。離婚してから十二年たっていた。タイムスリップのモノクロ画像のなかにいる。

二度と足を運ぶことはないはずだった結城家に、長男の長男、結城守人の実の母として守人の棺の傍らに座り、ひっきりなしの弔問をうけているのである。かつての夫結城大輔の采配であった。わたしはひと目守人の顔を見て、（モリのばか）と心のうちに別れをつければ退出するつもりだったのだけれど。

「守人の生みの母親はおまえしかおらん」

わたしがいまの奥さんだじょうぶなの、というのに、大輔は気にせんでよかと譲らなかつた。言い出したらひかない。彼の二度目の若い妻の姿はついにわたしの視界にはあらわれないままだった。

サキもわたしのそばにいない。奥のほうで伯母達、従兄妹たちに囲まれているのだろう。読経は続いているが焼香は途切れがちになっていた。大輔が巨体をわたしのほうに傾けて「ジャンバラヤの連中はどうした」と訊いた。え？と訊き返しそうになって思いだした。

「おやじときたら、ロックもパンクも喧しいのはぜんぶジャンバラヤで片づけるんだ」と守人がいつていたのを。

「カマタくんたち、あさって福岡のライブハウスでお別れ会をしてくれるんですって」あなたもきませんか、といったような気がする。

「おれはよか。連中が気をつかうだろう」

かれは警察で憔悴しきつた彼ら、守人のマンションに残った彼らに会っていたのだ。なんとか止められなかつたものか、といったという。

回り廊下の向こうからざわめきが聞こえる。ときどき若やいだ笑い声も漏れてくる。冷房がよくきいていて寒いくらいだ。縁側のガラス戸を透し見える、きちんと刈り込まれた庭の植木、池や灯籠のすがたは変わっていない。なんでわたし、ここにいるの。そうだ、守人が死んだのだ。で、守人はどこにいるの。ここに。このお棺のなかにはいつているのよね、モリちゃん。あんた、そんな狭い暗いところで息苦しくないの。窒息しそうじゃない？

にんげんは、ぜったいに起こってほしくないことが起こったとき、まずやるのは起こったことをそのまんまうけとらないこと、現実との意図的断絶。

いやだ。いやだ。こんないやだ。

いやだ。いやだ。こんないやだ。

ノーノー、おおノーよ。

ノーノー、ノーノーノーノーノーノーノー、もう、ぜったいいやだ。

成田を発つ前の晩、わたしの神経はこれまでになく（旅立ちの前の情緒不安定はいつものことだが）繊細かつ微妙に震えがやまず、一睡もできなかった。思い出したくもないのに、あたまの中で、繰り返しサキとの連日の言い争いが再現される。アアいえばヨカッタ、こういえばヨカッタ、そればかりだ。

——なんでなのよ。どうしてメノウと一緒にいれないの。可哀そうだと思わないの？——どうして今になってそんなこというのよ。預かってもいいよっていったじゃない。——あなたがどうしてもしたいことがあるから育てられないっていうから、協力するとはいったよ。でもサキは、それよりガツちゃんといたいんでしょ。それはいいから、メノウもインドにつれてってあげなさいよ。

——インドじゃメノウが病気になるっちゃうよ。生水は飲めないし空気も汚染されてるし、連日四十度の猛暑だし。——そんなの酷暑期だけじゃないの。プーナのアシユラムなら清潔だし水も飲めるわ。子連れでもだいじよぶだつて。——だめ。自信がない。——あなたガツちゃんのほうがメノウより大事な、もう。——あのひとが、自信がないの。メノウのお父さん、できないんだよ。——そんなら別れなさい。サキをほんとうに愛してるなら、サキからメノウを引き離すなんてしちゃいけない。愛じゃないよ。ぜつたい。——もういいよ。メノウの面倒をみるのが嫌ならそういつて。——そんなこといつてやしないでしょ。メノウがかわいいにきまつてる。だけどね。メノウはこの頃なんだつてサキ、サキつてあんたじゃないと夜も日も明けないのよ。わたしじゃダメなのよ。——ううん。わたしよりアッピーピに育てられたほうが、ずっとあの子は幸せだわ。——そんなことないつて。サキがいちばん。——なによ、いまさら。どうせわたしは人非人ですよ。世間体わるいし。——いいたいことはわかつてるから。——じゃ、どうして産んだのよ。みんなあと一年と三か月、二十歳になるまで待てとつたのに。——産んだからつてどうしてじぶんで育てなきゃならないの。だれがきめたの。今はできないつていうだけなのに。（サキの声がかん高く悲鳴に近くなつてくる。もうお手上げ。——どうしてひとを殺しちゃいけないの、つていうのになんと答えよう。）——なぜなんてないよ。そうなつてるの。理屈ぬきよ。——じぶんだつてそうしたくせに。——ちがう。ちがうよ。離婚したときに、子どもをわたしにしてくれなかつたのよ。だからあんたたちがひとりわたしのところに来られるようになるまで、五年間待つたわ。——おなじことよ。——おんなじじゃない。——おんなじだつたら。（サキがぞつとするような眸でわたしを見据えた）

——サキ、わたしに復讐してるつもり？——わかんない。（瞬間、サキがにと笑つた）ねえ、メノウをみてくれるんでしょ。わたしを悪者にしたけりや、すればいいよ、いくらでも。ふいに絶叫とも悲鳴ともつかぬ声が、天井から降ってくるようだった。硬直したようにからだを弓なりに反らせ、胸をかきむしり歯をくいしばっている。サ、サキつたらどうしたのよ。サキの顔はぐちゃぐちゃに歪み毀れかけている。なまじ美形なだけに迫力があるのだ。吊りあがつた眸に鬼火が炎えていた。

「あんたは風だものね。イタリアに行くといったら一週間後には飛ぶんだから。あんたにかかっちゃなんでもたちまち吹きとぶね」

「それってお尻が軽いつてこと?」

「そうもいえるかな」

「ばかみたいじゃないの」

「うーん、ばかといえ、ばか」

それから神妙にメノウを抱いて緊張しているらしい淳に向かって、

「淳くん、ふたりをよろしくね」といい、「それではおバカ様いってらっしゃい」と手を振るとくるりと背をむけていってしまった。……大と小の男をひきつれて行くのはわたしのほうだよ、都子。

ミラノからフィレンツェまでは汽車に乗る。それからピサ行きの特急に乗り換えて降り立ったのがポンテデッラ駅。れいこの家はそこからタクシーで十五分だ。

「もうすぐだからね、ピアネッロ」

眠り込んだメノウを荷物みたいに肩に掛け、片手でスーツケースを押し上げて歩いている淳にいう。

旅行に出るから、メノウはぴったり淳にくっついて離れない。淳はメノウを肩車したり、スーツケースの上のせてカートを引っ張って歩く。わたしがメノウに靴をはかせたり、服を着替えさせたりの話をやることがまったくなくなっただけ、サキがいなくなっただけから初めてのことだ。つかの間の解放。しかしいつもつないで歩いていたメノウの掌の感触、やわらかくぶくぶくしたあの感じだけがからっぽのわたしの掌に残っている、これも妙なものだ。

タクシーはブドウ畑のあいだの白っぽい砂利道を登っていく。トスカーナの丘の道だ。ようやく登りつめたところで、薄茶色のレンガ造りの建物が草原の台地見えてきた。

二階のポーチから駆け降りてくるのはだれ?

「れいこだわ」わたしはタクシーの窓から手を振った。

外階段の真下に、夾竹桃の木が濃い桃色の花卉をびっしりつけていて、一瞬くらくと眩暈がした。

「ポンテデッラの駅から電話して、すぐ出たにしては遅かったじゃない。心配したわ」
「れいこもわたしたちの降りるのを待てずに叫ぶ。」

「迷ったのよ。ピアネッロといってもわからなくてね。アドレスみせたらモンテフォスコッリってあったでしょ。」

「あらあらモンテフォスコリはもうひとつ向こうの丘の街よ」

れいこはわたしのスーツ・ケースを運びあげながら、遠くのなだらかな丘を指さした。てっぺんが小都市ともいえる街になっただけだ。薄茶色の石垣や建物、時計台の塔などがかすんでみえる。

「わたし、ピアノソロって、住所だと思ってたの。そしたらこの家の、なんていうのかな、呼び名？」

「屋号のようなものよ」

「ピアノソロ館か。みんな知ってたわよ、モンテフォスコリの人たち」
「そう。この丘の上の一軒家だからね。うちしかないの」

セバスチャン、アグステイーノ、カテリーナ！

れいこが三人の子ども達の名を呼ぶ。居間の床はレンガで、今しがたまでかれらは遊んでいたのだろう、玩具が散乱していた。

「みんな恥ずかしがりやなの。隠れちゃったのよ」とれいこが肩をすくめた。

淳はメノウといっしょにベッドに潜りこみ、ピアノソロの子ども達のうち、顔をみせたのは十二歳の長男のセバスチャンだけだった。もう、大人の背丈のあるこの少年の、憂いを潜ませているような微笑には惹きつけられる。

「チャオ」

とかれは囁くように挨拶し、れいこから教えられたのだろう、コンニチワ、と頭をこくと下げた。じつとわたしを見つめてから、れいこことイタリア語でなにやら話をし、さりげなく外に出ていった。

「セバスチャンはどこに行っても社交的で愛想がいいから、世間づきあいの下手なマリオやわたしをたすけてくれるの」

たしかにセバスチャンの人懐こい笑顔はすてきだけれど。とわたしは口にださずに思う。憂いというよりニヒルだな、あのまなざしは。

「いつまでいられるの」

れいこわたしは、台所のテーブルに向かいあつてズッキーニを刻んでいた。

「二週間くらいかなあ。かまわない？」

「もちろんよ。いつまでだつていてほしいわ」

「淳は一週間しか会社の休みがとれなかったから、先に帰国すると思うけど」

「そうなの。でもこれから淳さんも一緒に三人で暮らすんでしよう」

「それは」とわたしはひと呼吸おいた。「ちよつとわからないわね」

「そうしてあげたらいいのに。メノウちゃんが可哀そうだわ。おとうさんもおかあさんもいなくなるなんて」

「淳はもちろんメノウを引き取りたいのよ。でもいまは住み込みで働いているから」

れいこの納得いかないわ、という反応が気になる。じつは検討しなかったわけではない。淳さんとあなたなら夫婦とみられなくもないわね、という母や伯母達の忠告もしくは牽制が微妙に作用して淳もわたしも腰が引けてしまったのだ。

「あんなに嬉しそうに淳さんと遊んでいるのに。周りの目よりメノウちゃんをいちばんに考えてあげて」

「いままでどおり、淳はしょっちゅうメノウに会いにくると思うよ」

のん気そうにいったものの、わたしも、やがてくるであろう淳とメノウの別れの愁嘆場を思うと気がめいってくるのだ。往きはよいよいかえりは怖い、……こわいながらも通リやんせ、か。イタリアくんんだりまできても、逃れきれぬは家庭のすったもんだ。いやさ大仰な。メロドラマは好きなのじゃない。メノウはきげんよく遊んでいるし、淳も初めての

イタリアが満更でもないふうだし。彼はすぐ思いを口にだすタイプではないけれどなんとなく解るのだ。現実逃避といわれようとまずはここピアンネッコを愉しまなくては。

「うえの原っぱから夕日をみましようよ」

午睡のあとでれいこが誘いにきた。

前庭の桜の木の下で、メノウが手作りのロープの長いブランコに乗っている。淳がゆずってやっていた。こどもたちはてんでんばらばら、庭のあちこちで気の向くままに遊んでいるようだ。アゴステイノは二輪車の練習に熱中し、カテリーナは人形でままごとだ。

巾ひろいデニムの前掛けをして、長い髪を束ねたれいこは、すっかり果樹園の主婦になりきっている。新宿の路上で、ギター抱えて歌っていたパンク少女が。

ピアンネッコの暮らしぶりときたらひじょうに荒あらしく原始的かつシンプルである。カブツイーノをれいこの夫のマリオがたっぷり淹れてくれる朝、それにスグリのジャムとパンだけ。それもおそろしく堅いパンなのであった。昼食にフィノッキオの葉と茎を茹でたのをスパゲティのうえに山ほどのせ、ちぎりたてのポモドーロのぶつ切りもザクザク混ぜ、オリーブ油とビネガーを好きなだけかけて食べる。バジリコと粉チーズは薬味だ。れいこにわたし、醤油も滴らせる。ピアンネッコでは家族みなベジタリアンだ。肉も魚も摂らない。しかし乳製品ことにチーズとヨーグルトはふんだんに使う。ごはんがたべたいといっていたメノウもいつのまにかパスタをたべている。しかしトマト・ソースもチーズもいらぬ。ひたすら醤油をかけている。

「ここで暮らすようになって日本にいたときのように料理していないのよ。みんなおなかがあくと台所に食べにやってくるし、子ども達は一日じゅう森や草原で遊んでいるでしょう、そとでピクニックみたいにごはんをたべるのよ」とれいこがいう。

「学校は？」

「行っていないの。自宅教育の許可とって」

「ぜんぜん？」

「そう」

それでも長男のセバスチャンはそろそろ、モンテフォスコリの中学に入りたがっているという。街の友達ができたからだ。小学校までの学力は読み書き、算数、歴史などをマリオとれいこが教えてきたので問題ないらしい。メノウもこんなところで育てたいなど、ちらと思う。

学校に行かない子ども達は、朝の勉強が終わると日が暮れるまで野山を駆けまわっている。下のふたりの兄妹、八才と六才のアゴステイノとカテリーナが恥ずかしそうに食堂にはいつてきた。れいこに促され電車のオモチャやレゴをそとメノウの前におく。それからふたり、目配せするとレールを並べ、電車を走らせてみせた。メノウにやっこらん、と身振りできそう。メノウはさっそく飛びついたが、ふたりの兄妹はなにやられいこに囁いていた。これでいいんでしょ、というように。

メノウはそんなことには頓着なく、床に敷いたレールの上に電車を走らせるのに夢中だ。「あの子たち、泉に水を汲みにいつてくる、つていつちやったわ」三人で遊ばせようと思つたのにとれいこがいう。

「アゴステイノとカテリーナは仲がいいのね。いつもいつしよみたい」

「そうなの。あの子達まるで夫婦よ。カテリーナはアゴステイノが好きで好きで、かたときも離れられないの。アゴステイノはセバスチャンとちがって神経質で内気だから人になつかないし、あの子のほうも妹といっしょにいるのがいちばん好きなのね」

そうか。学校にいつていないから、二十四時間、ふたりはいっしょにいられるのだ。至福の恋人たち。

刻みおわった山ほどのズッキーニが大鉢に盛られて調理台においてある。

このズッキーニ、どう料理するの？

わたしはすくなくならず空腹を覚えていたので、早く夕食の手伝いをしたかった。

「料理つてもものじゃないの」

彼女は、天板に油を敷いてズッキーニをぎつしり並べ、塩と小麦粉を香料を振り入れ、それを何度か重ねると表面にたっぷり粉チーズを振りかけてオーブンに入れた。

「四十分ほど焼けばできあがり」

あとはスパゲティを茹でるだけ。トマト・ソースは作り置きしてある。

子ども達に食べさせた後、大人が食堂に集まる。その日はじめて淳に逢うような気がする。彼も忙しい。いつのまにかメノウの人懐こさにつられて子ども達と水汲みに丘を下り、パウラ叔母さんの草刈りを手伝い、マリオの仕事の手伝いまでしている。けどももう時間切れ。淳の休暇は一週間しかとれなかったのだから。

淳は出発の日が近づくとなんがなし、しょんぼりして、ただでも無口なのにいよいよ口数が少なくなっていた。

マリオも、もの静かな、いつも思索にふけっているような雰囲気の子だが、彼が、（れいこの翻訳によると）

「わたし達家族はメノウはもちろん、あなた方家族が大好きだ。ずっと長くいてほしい。しかし淳が日本に帰ってしまったら、こんなに淳を慕っているのにメノウはどんなに悲しむことか。深く傷つくだろう。ちいさなメノウにそんな苦しみを耐えさせたくない。わたしたちも辛い。だからいまはここに残らないで、ジュンといっしょに帰ったほうがいい」と言っているという。

「それに情がうつるのが危険だって。どうせずっと一緒にはいられないのだから。一生一緒にいられるならいいけど」

れいこがわたしのベッドの傍らに立ち、声をひそめて伝えにきた。真夜中である。

「ごめんなさいね。わたしは残ってほしいんだけど」

れいこは涙ぐんでいる。

帰ろう。きっぱりと決断。速いのだ。

チケットの変更はマリオが手配してくれるという。パリ経由の格安の航空券が見つかった。

ミラノからの帰りの飛行機では、わたしのシートはジュンとメノウから離れていた。日本に戻ればいよいよ、子育て再開だ。できるだろうか、ひとりで。こわいよ。しかしいまは考えまい。さすがに疲れて頭がシビれているのだ。

胸のまん中に水たまりができた気分。

淳は、サキを待つだろう。

ずっとずっと。そういう男だ。

5

メノウの失踪から十日目。午後六時。

電話のベルが鳴った。すは警察、と身構える。

「アッピー？」

まのびしたメノウのハスキー・ボイスだ。十日ぶりに聞くメノウの声がまぶしい。

「あんた、どこにいるの？」

「あ、いま駅。これから帰る。はらへった」と、それだけで料金切れの音がして電話は切れた。

台所に駆けこみ冷蔵庫の中身を点検する。かろうじてメノウの好きなトロピカル・カレーならできそう。パイナップルが冷凍してある。それに昨夜の残りのトウモロコシでコーンスープだ。

おおいそぎ、玉ねぎを刻み始める。そこで気がついた。こんなことしてる段じゃない。捜索願を出しているのだ。

まず警察、学校に、それから東京の母、弟家族に連絡しなきゃ。メノウのやつ、生きて帰ってきたわよ、と。もちろん都子にも。

都子には、わたしがメノウといっしょに長崎にきてからはめったに会うこともなくなつたのだが、電話とメールのやりとりで、わたしは相変わらず保護されている。旧石器人間を自称するわたしが、携帯電話なんぞ持つとは節操のないことである、と非難されながら。きっかり三十分後に、メノウはごくあたりまえの声で「ただいま」と帰ってきた。

しかしひとりではない。うしろに女の子がひとり立っていた。

「あんたね、どこに行つたのよ。もう、いつ死体確認に出向かなきゃならないかって覚悟してんだから」

「ごめん」とひとこと。それから、

「これノエミ。泊めてもいいでしょ」

と、うしろに立っている女の子を紹介する。

メノウより七、八センチは背が高く、高校生か大学生にみえる。が、メノウと「タメ」だという。(タメ、とは同年の意である。タメ友、タメロなどと用いる。語源は不明)

「川原ノエミです。よろしく」

色白でふっくらした頬の、おひなさまのような顔立ちだが、髪は赤茶色、ほつれた長めの前髪をひたいで分けて、耳の両脇に垂らしている。白地にロゴ入りのTシャツに短パン、のいでたちは可愛らしいが、たっぷりした胸のふくらみは大人の女、なのかわ。

圧倒されそうなのを踏んばってふたりの前に立ちはだかる。

「まさか、あなたも家出人なの？ おうちに連絡しないとだめよ。ここに泊るなら」

「うちは大丈夫です」とにっこりする。余裕あるわ。

「了解済みなんです。学年で三番以内に入ったらひとり旅させてくれるって親が約束してくれたから。それとうちの学校は二期制で今、試験休みなんです。寝袋、持ってるんで玄関でも台所でも寝れます」

語法が気になるが、リズミカルに喋る娘だ。

「ふうん。それで三番以内に入ったんだ」

「そう。めっちゃ勉強したんですよ」

語尾を伸ばすな。ま、歌ってるんだと思えばいいかと妥協。

夕食後、メノウが風呂に入っているあいだにノエミにインタビュする。どうせメノウになにを訊いてもはかばかしい答えは返ってこないにきまっている。

「どこでメノウに会ったの」

「あの子ねえ、うちの教会の裏の物置にもぐりこんで寝てたから家につれて帰ったんですよ。すっごく疲れてる感じで、風邪ひいて熱も出たみたいだし」

「面倒みてくれたの、ありがとね。あなたのもと、教会なの。おうちのひとびつくりされたでしょ」

「いやあ、感心してましたよ。東京まで自転車でくるなんてすごい、って」

「そうか。自転車なくなってたの気づかなかったわ」

「けっこうのんきだね、おばさんって。お金も節約して教会や神社やお寺に野宿して、コンビニの弁当で食いつないできたんだって。インドに行きたいっていつてたけど、めんどくさくなってやめたらしいよ」

「お金はどうしたんだろう」

「お年玉とかね、誕生祝いとか、小学校のときからずうっと貯めてたらしいよ。十二、三万円にはなってたみたい」

「ふう、しつかりしてるんだわ……で、ふたりでここまでなってきたの」

「新幹線で、あとはバス」

「自転車は？」

「宅急便で送り返した」
なあんだ。

すぼん、となにかが抜けた。あっけないともあつげらん。

「メノウってノエミちゃんからみてどんな男の子かな」

「やっぱり訊いてみたいのだ。」

「うーん。まずなんていってもイケメンだね」

「いけめん？」

「そ。顔がいいってこと。それにほんものの天然ボケ。ウケをねらってるんじゃないっていいだろう。ノエミが教会の子というのも面白い。もともとプロテスタントのようだからメノウとは少しく空気のことなる宗派である。」

「将来は、女教師になるのかな」

「ううん。弁護士になる。高収入だし、出産、育児をしながら働けるし。うちの教会、貧乏なんだから」

「へえ。でも出産に育児なんていうところをみると、結婚はするのね」

「うん。でも夫にするなら主夫してくれる人がいいな。家事をぜんぶしてくれるひと」

「あは、それいいわね」

「みつからなかったらメノウでもいいわ」

「あの子、家事みたいなきましましたこと、マメにするかもしれないよ。意外に」

「上手だったよ。うちで作ってくれたごはん。料理のセンスあるわ」

うちの台所になんぞいちども立ったことがないメノウなだけだ。

翌朝、ふたりは納豆ごはんにシジミのみそ汁、イワシの干物といった朝食をとった後でミルクを五百CCたっぷり飲んでよくしゃべっていた。ファイナル・ファンタジーとかのゲームをいかにクリヤーするかについてらしい。しかし驚いたことに、「学校に行くから」と、いつのまにか制服に着替えたメノウがいだしたことだ。ノエミがすかさず、

「わたし、きょうは鹿児島だよ」

「帰りに寄る？」

「わかんない。メールするよ」

「じゃ、ね」

「うん。じゃ、さよなら」

あっさりした別れ方だ。

玄関のそとまでメノウを見送ってから、くるりとわたしに向きなおってノエミ、

「メノウはどうしておばさんと暮らしているの」と訊いてきた。

メノウは肝心なことを話してないな。

そこでわたしが（かなりドラマティックに）メノウ四歳のときのサキとの別れの物語を話しだすと、ノエミの目からぼろぼろ涙が滴り落ち、ついにはしゃくりあげて泣きだしたのだ。

「わたし、帰りにまた寄っていい？」

「いいよ、もちろん」

ノエミはひとまず駅まで行って、博多から新幹線にするか、船で熊本経由にするかきめるといい、シャワーを浴び、髪を乾かし、時間をかけて身支度をしていた。

「あの、ちょっとしたプレゼントです」

出がけにノエミはティッシュペーパーにくるんだものを掌にのせてくれた。

布製のちいさなリスだった。きよとんとしたまるい眸、ころころのおなががちいさいころの泣き虫メノウみたいだ。

「ピュウって名前よ」

大事にしていたにちがいない。

「わたしもこんど、ちよいと家出をしようと思ってる」

都子にいった。

「いいでしょう。あんた、どこか破れたもんね。永遠のさすらいびとになりなさい」

彼女はすこし寂しげにいい、この頃体調がよくないの、といった。そのような季節になったのだ。

「もしもし、わたしよ、サキよ」

国際電話だった。

「メノウが行方不明だったんだって。東京のおばあちゃんから聞いたわ」

「もう帰ってきたわよ」

「そう、よかった。大丈夫だった、おかあさま？」
すぐに飛んで帰国しようかと思ったとサキはいい、わたしはその必要はないと答えた。
短い電話だった。

「おかあさん、またうなされてたよ、もう。へんな声で唸らないで」サキが眉間にしわをよせてから、寝室のドアから顔半分のぞかせて言う。

「あんたがゴジラみたいな埴輪になって出てきたのよ」

「やだ。わたしは怪獣か」

ときどき娘のサキの登場する、いわゆる「怖い夢」をみるのだ。恐怖に叫び声をあげて飛び起きたりする。夢分析などしたことはない。あなたの潜在意識には娘から殺される恐怖がある、なんてとんでもないこといわれたくないもの。それに思春期まった中のサキとわたしがうまくいかないということはなかった。それなりに小競り合いはあったけれど。夢のなかのサキはなぜかいつも巨大なトーテムポールであったり目鼻が空洞の埴輪と化してわたしを襲ってくるのだ。わたしは必死で逃げる。みた夢をすぐに忘れてしまうので、怖い夢をみたからといって現実に娘のサキを怖がったりもしない。わざわざいうことでもないけれど。

守人が死んだあとも、鎌倉でのわたしとサキの生活は変わらずに続くはずだった。けれど、実際にはそれから一年もしないうちにじわじわとなにもかもが変わっていった。

あの夏、わたしがやったことといえば。

バンドの仲間の男の子たちに守人のつくったテープを何十本もダビングしてもらい、だれかれみんなに配り、守人の写真を等身大に引き伸ばし、腰越の家の階下の小さなピアノの部屋を「守人の部屋」にするのだと宣言し、扉の内側に貼り、その部屋に入るものは扉をあけ、閉めたと勝手に守人と顔をあわせるのだ。守人のジャンパーにマフラー、お気に入りのシャツにポーチが壁にかかり、棚には守人の「いのちより大事な」ジャーマン・ロックの神さまローディアスやトム・ディンガー、それにジョン・ケールやブライアン・イノのレコード盤がぎっしりつまっている。むろん守人のバンドのライブの録音テープもステージ写真といっしょにピアノのうえに鎮座しますのだ。わたしはひと月のあいだ守人の作詞のノート、日記、手紙や手帳を整理し、写真にイラスト、落書きの紙切れにいたるまで、ようするに守人の遺品の山に埋没した。かとおもえばおそろしく行動的に守人の友人たちに会い、追悼コンサートしてもらい、打ち上げにバンドの仲間の子たちと飲みあかした。いっぱしの当時のジャーマン・ロック、ブリティッシュ・ロック通になったつもりであった。

守人のことに夢中になっていてサキが高二の夏休みになにをしていたか、憶えていない。陸上部で頭角をあらわしたサキは、厳しい練習に休みもなかったようだった。

覚えているのは肥ったのを気にして、四キロくらい減量しなきゃ、と騒いでいたことだ。

「野菜中心の食事にして」

「そうね。でも毎日走っているのに、野菜ばかりじゃパワー出なくなるわよ」

「おにいちゃんがいるときは、おかあさんはほとんどベジタリアンのメニューで料理してあげてたよね」サキが微妙に突いてくる。

「そうだ。あいつ、鎌倉のおふくろさんのところに一週間いたら三キロ肥ったっていったよね。男の子のくせに体重ばかり気にしなさんなよ。そういったら一瞬、イヤな顔した。が、かれは、わたしに不快な顔をしつつづける男じゃない。すぐに情けなさそうな声で、「ごめんよお。おれね、肥満恐怖があるんだ。こわいのよ。にくたいの裏切りが」

「やあ、シビアねえ」たかが三キロ肥ったくらいで肉体の裏切りなんて。とは口にださず。そう、わたしは守人のためにせつせとナスのハンバーグだの大豆のシチューやら、納豆スパゲティなどを、ベジタリアン・クッキングブックを教科書に、食卓に並べていたのだ。

「おかあさんさ、おにいちゃん死んだのわたしのせいと思ってる」

まったくなにをいうかと思えば……。陸上部の練習に明け暮れて、家には寝るためだけに帰るようであったサキが、夜遅くいつになくリビングルームでぼんやりしていると思っただらふいにこんなことを口走った。

「思うはずないでしょ。どうしてそんなこというの」それをいうならわたしのほうよ、とはいわない。

「だっておかあさんにはおにいちゃんのことしかなかったもの」

「あんまり突然だったからね、ほかのこと考えられなかったのよ。いやとつぜんではなかったかもしれない。予告してたんだよね、それとなく。気がつかなかっただけで」

煙草に火をつけた。そのころのわたしはかなりのヘビースモーカーだったのだ。わたしはしばらくいべき言葉をさがしていた。

「あのね、もっとも身近にいるひとに死なれると、自分のせいじゃないかってみんな思うのよ。アアすればよかった、こうしたら死なないですんだのではないかって。みんな、誰でもだよ」

「そうか。わたし、いつもおかあさんはおにいちゃんばかり大事にしてずるい、って思ってた」

「それもたいていのひとにあるよね。わたしはノブ叔父さんが、わたしよりずっとおばあちゃんに可愛がられてたと思込んでたわ。ほんとうはどうだったのか、わかんないよ」

「だけど、なんかわたしの代わりに死んでくれたみたいなのがするの、おにいちゃん」

「なんかキリストみたいだね」

「おにいちゃんが、イエス・キリスト？ うそー」サキが嬉しそうに手をたたいた。

このあたりまでは、母と娘のどこにもあるような会話だったが、どこでねじくれたのだらう。おしまいにはサキが、

「きらいきらい、おかあさんなんかきらい」と叫んだのだけは苦い後味の記憶として残っている。なにが原因だったかも忘れた。かんたんに忘れるほどのものだったのだ。

サキがわたしと口をきかなくなったのはそれからまもなくだった。

「保護者会のお知らせです」とか、

「修学旅行の積立代、明日までに」などの必要最小限の会話ですませる。

わたしにはにこりともしないが、たまに訪れる母や弟達にはにこやかに挨拶もするし、愛想もいい。なにがなんだかわからないけれど、そのうちまた変わるわよ、と内心、とて

も寂しく情けなくもあつたけれど、わたしも踏ん張った。まあ、そんなものでよう、反抗期っては。

だからサキが長距離で高校新記録をだしたことも、国体出場が決まったことも知らなかった。そして半年後、卒業してからのサキは、じつによく喋るようになり、同時に陸上部の先輩だった男と結婚してしまった。メノウがおなかにいたのだ。

守人の死後、二年目にメノウは生まれた。

「成田に着いたところよ。これからそっちに行くから」

サキは、メノウが三歳十カ月のときにわたしのところに置いて、インドに行ってから、一年に一度は日本に帰ってくる。帰ってこなくていいのに帰ってくる。ようやくメノウとの暮らしにリズムが出てきて調子よくいった頃になって。

そのたびに修羅場なのだ。ついにはサキが帰ってくるらしいとサキの友人から伝え聞いただけで胃がきりきり痛むようになった。しかしサキにメノウを会わせまいとするのはもっとエネルギーの消耗する戦いなのだ。

じぶんの子どもをわたしのところに置き去りにして恋人と家を出たことに、そしてそのあとメノウを引き取ろうとしなかったことに、サキは罪悪感をじつは感じている。

サキと会う場所はまずはメノウに知られないように駅前の喫茶店にする。

「だからあんたとは、距離をおくほうがおたがいのためとおもうのよ。これはどうしようもないの。罪悪感なんか引きずってたらだめ。ここまできたらいっそもつと、開き直りなさいよ。といたってムリか」

「ムリだつて。だいたいあなたがそういつてじんわり罪悪感をおしつけてるんだよ。わかっているの」

そんなことないよ、といいかけて声をのみ込んだ。置き去りなどという言葉を使っているじゃないの。しかしここで引つ込みがつかなくなるのは嫌だ。

「そうかもしれない、無意識にね。そしてじぶんで認めたくない罪悪感というものはね、かならずリベンジを果たす。それがわかるから、わたしもその仕返しを迎え撃とうとしてしまうのよ。つまりあんたとわたしのあいだで闘いがはじまる。これって生涯つづくのだとおもう」

「ああ、やだやだ。どうしたらいいの」

「だからしばらく距離をおいたほうがいいっていつてるのよ」

「つまりわたしを遠ざけたいんだね」

サキの顔つきが変わった。

「メノウに会うなっていうの。はっきりいってよ。あんたっていつも遠まわしで思わせぶりないいかたするんだから。おにいちゃんも言ってたよ」

「守人がなんて」

ここでまともに反応しなければよかったのだ。しかし遅かった。

「おかあさんて、いいカッコしいだよね、っていつてたよ。ストレートじゃないのよ。口うまいし」

なんでわたしがここで総括されなきゃならないのよ。死んだ守人をダシにしてわたしを挑発するのはサキのいつもの手なのにかうかとのつてしまう。

「メノウに会うならずっとメノウといっしょにいてあげなさいよ。あんたと別れてからどんなになるか、メノウは一晩うなされたりひきつけ起こしたりたいへんなのよ。みてられないわ、かわいそうで」

メノウはちらとでもサキをみつければ、飛びついてゆくのだ。ただただ嬉しい。

「だったらなんで引き取ったりしたのよ。顔あわせればじくじくじく、嫌みばかり。罪悪感を持つなんてカッコいいこといってさ。じぶんがいいかげん植えつけてるくせして。メノウを小坪におくんじゃなかった。あー、大村さんに預ければよかった。大村さんの里子縁組の話、おかあさんがぶちこわしたんだから」

「なにをいうのよ」

どつちがさきに大声をだしたのか。気がついたらサキが叫んでいた。「見損なつたわ。もういい、これからじぶんでメノウを育てるから。あんたなんか罪人呼ばわりされるのうんざりだよ」

「ほかのお客様がいらつしやいますので、お静かにおねがいます」

店の支配人ふうの黒いスーツの男性がやってきて、テーブルにかがみこむようにして声をひそめ、しかし厳とした口調でいった。

「こんどこそ、穏やかにいきたいと願うのに（これは本当にそうだ）いつだって決裂、なのである。あさきゆめみしえいもせず。」

IV

九州号。

高速バスはひた走る。

わたしは高速バスの常連なのだ。ほんとね、乗り物ならばなんでもいいのよ、メノウ。おまえがうちにいなくなつてから、わたしはたえず乗り物に乗っている。行先は決めない。風は想いのままに吹く。ひさしぶりの守人の墓まいりにも行ってきた。おまえがうちにいるあいだにはできなかったことを片端からやっている。だけどおまえが死んだ守人の生まれ変わりって聞いたの、ほんとうだろうか。インディアンの血が四分の一混ざっているアメリカ人のセラピスト、ワドウダという老女がわたしの過去世をみていったのよ。おまえはどう思う？ わたしも信じているのかどうかわからない。

きのうはひさしぶりに家に帰ってきた。

この夏、異常気象のせいか酷暑も酷暑、熱中症でバタバタと倒れるニュースも相次いだというときに、冷房機は故障し洗濯機も動かなくなり、なんとまさかの冷蔵庫まで、ぴたりとその働きを停止した。こんなとき、おひとりでお暮らしですか、のおひとりさまは自

然法然天然居士。メノウがいてはそうはいかない。電気製品のひとつやふたつ、いや風呂釜もと四つだわ、そんなのなくなつて生きていくのに不自由しませぬ。あばら家といえども家あらばよし。「起きて半畳寝て一畳、たべるお米は一合半」というじゃありませんか。ほっほ。おつりがくるわ。とこう貧乏自慢をしていると、たれかかれから、お中元のそのめんの余りだの田舎から送つてきた馬鈴薯だののおすそ分けがやつてくる。

わたしね、もしかして人間だったのじゃないんじゃないかしらと思うのよ。(この文章、文法的にまちがってないよね) なんだろうこの頃デパートや郵便局、銀行などで自動ドアの前に立つてもドアが開かないことがよくあるのだ。足踏みしてみたりするのだけどびくともせず。あとからきた人がすうっと開いたドアを通るのにいそいでついて通るの、おかしいでしょう透明人間なら開かなくなつて壁でもドアでも通りぬけられるのだからそんなのではない。ではなんなのだ。それだけならまだしも、どうみてもわたし、この人間世界からはみ出す。ズレる。なんかしらないけど、いいたいことが届かないのよ。ほんとのこといつてるだけなのに。

このあいだも町内会の役員会で、会長のはきはきしてたいそう美人の奥さんに、「目立ってかっこいいですね」といったら、彼女はとつぜん激昂し、

「わたしは皆さんのために奉仕してるんですよ。目立とうなんて気持ち、小指の先ほどでもないのにそんなにいわれたら、もう役おりのわ」と真っ赤になって怒り出した。わたしは必死で、

「もちろんどんなに町のために地元で尽くしていらつしやるかよくわかっています。でもね、目立つって、悪いことじゃないですよ。わたし、目立ちたがり屋のひとつで好きです。無邪気で正直だし」といえばますます、

「わたし、目立ちたがり屋なんかじゃないっていつてるでしょう！ 失礼だわ」

だからだから目立つてすてきなことなんです。カリスマ性があるのだし、ひとを喜ばせることができるでしょうなどといえはいうほど収集がつかなくなる。そしてまた、

「なんでそんなことがわからないのかしらん、あなた頭のよいひとなのに」といつてしまった。心からそう思ったからだ。

おまえに電話で話したね。メノウはこともなげにいった。

「あんた、コドモだね」

コトバが届かないってことは心も届かないってことでしょう。おんなじ日本語話してるのにねえ。まるで透明膜が、人間世界とわたしのあいだに掛つてるみたいなのだけわ。

もとい。それでこの至福の台所暮らし、三日やったらやめられないってお乞食さんとおんなじだわね。ええ、四畳半のスペースに足踏みオルガン、円形のダイニング・テーブルと椅子。いまや唯一の同居人、愛してやまない老犬モティのケージも台所に置いている。

わたしはそこかたわらにマットを敷いて寝るのである。食べるのも寝るのも本を読むのも、オルガンの練習もここで全部すんでしまふ。(近所の教会でお葬式のあるたびに讚美歌の伴奏のオルガンを弾いているので)。なんでもかんでもちよいと手をのばせばいったんきめた居場所から一ミリもからだを動かさずにはすむ。あら楽だわねえ。こたえられないわあ。食べるつたつて料理らしきことせんでよろし。なんせメノウにいわせるとわたしは旧石器人なのだから。玄米を炒つてカリカリ齧り、野菜は生で、これも齧るか、ミキサーで野菜ジュースにもする。(ここは娘のおいていった文明の利器を活用する) フライバ

ンで炒って醤油をまぶしたイリコを常食し、大豆の酢づけ、たまにお菓子も作る。それもオシヤレなショート・ケーキやクッキーなんぞではない。そば粉のだんご、豆腐白玉、ふくれまんじゅうなのだ。ほとんど戦時中とかわらない。

おまえが小学生のころは人並にやれ誕生会クリスマス・パーティー、おはなし会と、近所中の子ども達あつめてお菓子のフルコースを大判振る舞いしたのだけれど。

リョウくんがね、とおまえがうれしそうに報告してくれたつけ。リョウくんは保育園のクラスメートである「アッピッピは（わたしのことをおまえが呼ぶようにマネして）おばあちゃんだよ。そしたらメノウくんよりさきに死ぬでしょ。おかあさんにメノウくん、ひとりぼっちになったらうちでごはん食べていいってきいたら、いいってよ。よかったね」といったそう。

ついでにモテイも食べさせてもらおう。と犬のケージにあたまを突っ込みながら、ぶつぶつぶ言っていた。前途は明るい。もうわたしはなにも思わない。

ただひとつ、死ぬまで生きてちょうだい、とそれだけだ。とりわけ強くなかった方がいいのよ。わたしには子たるもの、かくあるべし、これこそ理想、といった主義主張はない。しいていえば原生生物、アミーバやミドリムシのようであれよ。右いけ、左じゃと時代の波が襲ってきてても、変貌自在、くねくねによるいつのまにか生きのびて。

そうしたらメノウ、「みいんな、生きてるものにはいのちがあつてね。神さまから頂きたいのちだからだいにしようね」などとわたしはそんな御大層に、わざわざ言いかせてはいないのに、やたらに大事にするのである。幼児期にはアリさん、ミミズさんと仲良しというのも普通にありだが、メノウは小学校時代はもちろん、中学生になってもいやや九歳の今でさえ！メノウの前でゴキブリを叩きつぶしたり、クモやヤモリの類を掃除機に吸い込ませたりはできない。わたしはこっそり台所のシンクの片隅にネズミト리를仕掛けた。ネズミの糞の始末に根をあげたのだ。石鹼もチーズも齧られた。

「今朝ね、ぼくネズミに会ったよ。顔洗ってたら、足首を通って行った」とすましている。メノウ中学二年のときだ。どうも夜中に食パンやごはんの残りをネズミの通りみちに置いて養っていたふしがある。車にはねられたネコはほっておけずに連れて帰り、庭に埋めてやる。鳥かごで小鳥を飼ったりするのははげしく嫌う。蟬やクワガタも捕まえられていたら逃がす。動物だけではない。木でも草でも石ころとでもおまえは交感可能なのだ。わたしはひそかに思う。これならメノウは絶対だいいじょうぶだわ。じぶんのいのちだって大事にするにきまつてる。

メノウって子は八歳くらいまで女の子に間違えられるような、色白の顎のほっそりした子だったから、結城家の血をうけて頬骨の高く骨格のしっかりした守人には外見は似ていない。でも不思議なことにはぼやんぼやんとしたもの言いただけがそっくりなのだ。それからしゃがれ声も。

メノウの小学校のはじめての家庭訪問での、担任教師の第一声は「メノウくん、声がハスキーで……」だった。どこかで聞いたようなと考えれば、守人もおなじ家庭訪問で「声が低くてハスキーですわね」とおんなの先生から溜息をつかれた。なんか妙ね。内心思ったので忘れないのだ。子どもの学校での様子を知りたい親代わりのわたしとしては、歌声

ならともかく、子どもの地声に感心されてもねえ、と。したが電話でメノウの声を聞くと、守人かと一瞬錯覚することもあるのだ。

輪廻転生と過去世のはなし。メノウ、おまえはきいたことがないだろう。キリスト教の教義に輪廻転生の思想はない。

通りがかった教会でお菓子をふるまわれたのがはじまりで、元暴走族だったという変わった神父さんからわが子のように可愛がられ、教会学校に通うようになり、洗礼も受け、司祭志願の神学生にまでなったのだから。しない。メノウは教会にいたりびたり、教会がホームとなった。十代にさしかかるまでのおまえの千年王国が教会だったのはたしかだ。少年聖歌隊で歌い、ミサ仕えをし、聖母行列で十字架を掲げていたおまえはミケランジェロの天使さながら、だったよ。洗礼名も大天使ミカエルなのだ。

「ぼくってさ、守人にいちちゃんのうまれかわりなの」

メノウが訊いてきたのは、小学校も四年ぐらいのころだったか。サキや祖母達がおにいちやんと呼ぶからね。メノウが生まれたのは守人が死んでからだから、メノウは伯父にあたる守人に会ったことはない。しかしまわりで守人の名前を口にするひとびとが、とくべつの思い入れを込めて話すのを感じとっていたのだろう。

「どうしてそんなこと考えたの」

「隠田のおばあちゃんと叔母ちゃんが話してたよ。メノウは守ちゃんの生まれ変わりみたいね、って」

「メノウはどう思う。そういうの、いやじゃない？」

「いやじゃないよ。あのさあ、守人って天才だったんでしょ」

「ふう……そのようだったね。でもはやく死んじゃったから天才の仕事はできなかったの」

「どうして守人にいちちゃんは死んだの」

いつかはくると思っていた。しかしどうしても思いだすことができない。メノウになんと答えたか。すっぽりと記憶が抜けている。そしてメノウは二度と守人の死について尋ねることはなかった。

きょうも高速バスのなか。

空港へ。飛行機には乗らない。飛行場が好きなのだ。空に飛び立つ前の興奮は、空気伝染する。飛行場に行くのに意味や目的がなくてはならないってことないでしょう。

なぜか金魚の夢をみていた。屋台の金魚すくいをやりたくてたまらないのに母にせかされ斜めになって手をひかれていく。

目が覚めると雨がふりだしていた。

窓ガラスに雨粒が斜めにぶつかりつつうつつと糸を引いてる。見えてくるはずの有明海も岬の緑も霞んでみえないテレビ画面にもなにも映っていない。読むものといったら座席のポケットの街案内のパンフレットのほかになく、夜のスポットにグルメおすすめの店、ああもういらぬ、缶コーヒーもからっぽだし乗り込む前になにか仕入れてくれればよかつ

た。背中と腰をおもいきり伸ばしたいな。前のめりに屈んで眠っていたから、箱づめの死体みたいな姿勢になっていたのだ。肩も首もぎりぎり骨が鳴るようだ。足先は痺れている。雨はますますはげしくガラス窓を叩きつけている。ええ、いつものあの内なる静謐の至福瞑想の刻はいずこに。カケラもなし。

なんだってこんな日に乗らなきゃならなかったのよ。じぶんに腹をたて、苛立つ。

このぶんではピーブレイクも雨のなかだろう。それにしても、いつ読まれるのかあるいは読まれることなく捨て置かれるかもしれないおまえに宛てたこのノート、今日のバスは異常な揺れ方だから字がぐちゃぐちゃになってきたない。

おまえが、どうしてわたしのとこにきたか、を話したのは中学にはいつてからだだったね。それまではサキはインドやアメリカでたくさんお仕事があるのよ。とても忙しいのよと言っただけ、おまえもそれ以上しつこく聞いたりはしなかった。十五年前の夏の朝、サキが四歳になったばかりのおまえをわたしのところに置いたまま、男と出奔したのは…と、いえばかなりシビアになるね。ドラマティックだろう。もつともサキとサキのボーイフレンド全然そのように深刻ではなかったのだよ。出奔なんてきいたらげらげら笑うにきまっている。異星人である。なんせかるいかるいノリだったのだ。そういうふうであるからあの軽みがこちらにも伝染してサヨナラサヨナラと送り出してしまった。

でもそのまえにおまえが生まれ変わりがもしれない、そしてもしそうならまったく思い出せないでいるおまえのために、守人の話をしよう。

サキとガツちゃん、おまえは憶えているだろうか。サキのボーイフレンドだ。かれらが出ていったあの日、わたしは墓参りにゆくはずだったのに行きそびれてしまった。長男守人、おまえの伯父さんだね、の命日だったのだ。明日にしよう。あしたメノウといっしょに鎌倉霊園に行こう。保育園は休ませればいい。夕方五時にメノウの「おむかえ」に小坪保育園にむかいながら思ったのだった。なんでサキはわざわざ選んだかのように兄の守人の死んだ日に家を出てゆくことにしたのだろう。これで始まったのだ。メノウ、おまえに宛てたこのノートは。

キレル、という流行語がある。もはや市民権を得て、流行語とはいわないだろうか。メノウ、おまえにはキレルってことがなかったね。それがいいことなのかどうか、わからないけれど。

わたしはいったんキレたのよ、もののみごとに、しっかりと、ぶつとりと。世にいうキレたはキレたうちにはいらぬ。痲癩おこしてわめいたりひっくり返ったりなどはかわいらしいものだ。そう、キレルより、わたしのばあいは、いっぺんコワれた、のほうがびつたりくる。ひとたびコワれるとこわいものなしになる。

なんであなたはそんなに元気に、普通にいられるの。と都子という。最愛の息子には二十一の若さで先立たれ、娘はうんだ子供を養育放棄。えいやつ、と氣ばって荒っぽくはあったけれど引き取って育てればいままたはやりの引きこもり。「わたしだったら発狂

してるわ病気になるわ死んでるわ。あんたは不死鳥だね」とはおおげさな。引きこもりなどおそれるに足らず。高齢化社会で上は煮詰まっている。ゆっくり引きこもるくらいがちょうどいいのだ。すこしのんびりしておいで、人生のピー・ブレイクよ。バスを降りるとそれまで視界をびゅんびゅん掠め去っていた空や木やちよつと遠くの山なみが、眼の前におんと在る、つて面白いよ。色彩がくつきりとあざやかで空気も味がちがう。

今の世の中急ぎすぎだわ。エネルギーは大事にしなければ。省エネは目に見えないところでもおおいに務めよう。きれいはきたない。きたないはきれい。あまのじゃくもときには嬉しい。でしよう、メノウ。

だからメノウが学校にいかなくなったときも、気のすむまで休んでおいでといったよね。義務教育といってもたかだか百年たらず以前に国家が興した教育制度、これだけ情報過剰の時代になったのだ、勉強ならいつでもできるわ。集団生活合いません、の学校にいかない子供たちが出現して誰が困るの、わたしは困らない。

「奇人変人のクチかしらねえ」

都子が呆れたようにいうが、わたしはフツーなんて観念はとつくにすつとばしていたのである。

あの夏、といったってメノウにはどの夏のことかわからないよね。守人の死んだのも七月だったし、サキがメノウをおいてインドにいってしまったのも七月のおなじ日だった。なにか事が起こるのはきまってこの季節なのである。わが家の物語と夏のエネルギーは、どこかでシンクロナイズしているらしい。

守人が死んだあの夏のわたしは、異常なほど元気だった。わたしは泣けない。どうしてか泣けなかった。ぜったいに死んでほしくない息子の死に腹がたつて腹がたつてしかたがなかったのだ。ゆえに怒りの炎は熾火となりひたすら悲しみに埋没して泣き泣きの日々を送らせてはくれなかったのだ。はためには異様にエネルギーにみえたらう。しかしそれはある日を境にびたりと停まった。急停車である。

以来、高速バスの常連になった。なんで？といわれても正解なんぞあるだろうか。わたしは人生かくあるべきといったポリシー、主義主張なしの女である。むろんじぶんでそのように生きるべしと考えたわけでもない。旧石器人を自称したのも私ではなくメノウが名付け親であったよね。むりやりどこかに括るとすれば、拘束拒否症かしらん。なんでんかんでんいやいやそのまえに、人生の挫折しつぱい、ありすぎて、しよせん思うようにならないのが人生ならば、これいじょう悪いことはおこらないってことを肝に銘じている。悪いことなんてないわ。ほ。ここまできたら怖いものなし。だからよ。ゆらゆらと毎日が自由自在、ただただうれしい。なんていうのもウソだけど。かの詩人カリール・ジブランいわく、

挫折、わが孤独にしてわが孤高なる挫折よ

あなたは千の勝利より私にはいとおしく、

この世のあらゆる栄光よりなお私の心に甘い。

なのであります。わが人生は栄光にみちみちている。

おまえはさしたる用事も無いのに電話かけるなメールよこすなといってきた。たしかにおまえは十九歳。母の押し付け、正しくはばあさんの自己主張はおまえの語彙からいえばウザいのよね。けれどわたしはめげずに毎日メールを送っている。たいてい意味のない文面のやりとりがこの世にまかり通ると知った。

おまけにこちらケータイが使いこなせていないので、はからずも奇語造語の類が氾濫する。

☆こんどいつうう、でないあ行か。でない。

☆うぎ。

☆ばらばらじゃない？この絵文字。わかああああああああんない。
☆死ね。

「ちよっと、メノウからきたメール、なんて書いてあったと思う？」

「どうせいまどきの子どもはわたしらにとっちゃ異星人、そしてあんたはメノウくんからみれば博物館に飾られてる蠟人形のようなものよ。ウザいとか死ネとかそんなたぐいでしょ」

「当たり前」

「あんたねえ。高速バスにばかり乗ってないでさ、たまには街角でいまどきの中高生の会話を聞いてごらん。うざいだの、死ねだのいうコトバが飛び交っているんだよ。いちいち反応してたら身も心も持たないわ」

都子の友愛は偉大だ。子のない身の上ながらメノウの心に寄り添う術を心得ている。

「メノウくんはさ、なにかじぶんでも解らない、未解決の問題を抱えてると思っただけだよ。それを誰にもいえず、こらえにこらえ、必死で我慢してきたのだから、しばらく好きにさせてあげようよ。よく持ちこたえてるとおもうよ。ウザいも死ネも、暗号みたようなものよ」

「はあ、わが罪はつねにわが前にあり。ということになるか。罪はわたしの目の前にある、じゃリズムがずっこけるよ」

「文語派だねえ。あいかわらず」

ヒソプで水をふり注ぎ、わたしの罪を取り去って、

わたしを洗い清めてください、雪より白くなるように」

「おおよく憶えてる。暗記力抜群だったもんね」

「近頃はとみにおとろえているのだわ」

都子は詩篇うた会をして遊べる唯いつの友達だ。しかし厳しい。

「メノウくんがいなくなったからって、ふらふらしてたらダメよ」

人間、束縛から完全に自由になるなんてありえない。じぶんのエゴにだって縛られてるよ、おのれを律し、ぴしっとしなさいという。

しかしおまえがいなくなってもこのわたしを拘束しようってものは多々あるのだよ。ときどき空腹までが束縛に思えることがある。なんだって口にしたべものを入れない限り、おなか为空いた。なんか食べたい食べたい、という想念から自由にならないのだから。ここは風頭山の森のなか。近所にパン屋だのコンビニだのは皆無なのだ。だって着るものも

ちろん、からだを締め付けたり引つ張ったり塗装したりが耐えられませぬ。靴をはくのもなんとかインド式に一年中サンダルで通したい。サリーやパンジャビ、チベットの坊さんのまとうローブみたような服がもつとも心地よい。衣食住だけではない。ひととの約束もある種束縛であるからして、なるべく約束はしないようにしている。それじゃあ友達が少ないでしょう、って。たしかに。だから友達はずくらないように心がけている。離れていった友達も多い。なにしろ約束束縛の類い大嫌いなだから。拘束もいくばくかあるほうが、生きるエネルギーの源になるのもたしか。

そういえば守人のやつ、鎌倉のおふくろさんのところに一週間いたら三キロ肥ったっていつていた。男の子のくせに体重ばかり気にしなさんなよ。そういつたら一瞬、イヤな顔をした。が、守人はわたしに不快な顔をしつつける男じゃない。すぐに情けなさそうな声で「ごめんよお。おれね、肥満恐怖があるんだ。こわいのよ。にくたいの裏切りが」「ひやあ、シビアねえ」たかが三キロ肥ったくらいで肉体の裏切りなんざ。とは口にださず。

きょうも高速バスのなか。

飛行機でもなければ新幹線でもない。

離陸する一瞬の醍醐味を味わうのは飛行機ならではのながら、チケットが高過ぎ。かのフランス貴族ヴィリエ・ド・リラダンのごとく「生活？ そんなものは従僕にまかせておけ」と嘯いてみたくはあるがね。時代錯誤でありましょう。新幹線は車窓がつまらない。などとゴタクをならべているもじつのところ、他愛ない理由なのだ。その一、高速という名称がよろしい。精神と肉体の高みへと、高速は光速につうじ、その二はピー・ブレイク、トイレ休憩があること。狭所脅迫症のわたくし、高速バスが死ぬほど好きなのはこれがためである。飛行機の狭いトイレでドアが開かなくなり呼吸困難の発作に襲われそうになったのだ。

十分後には出発しますのでおいそぎご用をおすませください、ですと。詰め込まれていた箱のなかから飛び出す瞬間の開放感。

バスから降りてつきぬける青空と木立のみどりにくらくらしながら、ゆつくりと、真四角な角砂糖みたいな白い建物に向かって歩いていったあるとき。耳の奥にざわざわと風が鳴るようだった。遠い潮騒がだんだんひとの唸り声のようになり聞き覚えのあるメロディに似ていてぞくっとした。似ているなどというものじゃない、あれだわあれ。守人がつくった曲よ。

いちまいの紙きれに色えんびつで／いちまいの紙きれを紙ヒョーキに

へびとりんごの木／いつかどこかで／へびとりんごの木／あえる気がして

ただただこれだけを繰り返している。

だけど歌っているのは聞き覚えのない声だ。いや、そうじゃない。守人の交通事故のときに一度しか会ってないけれど、あの髪の毛の長い、黒いワンピースを着たやせて目の大きな女の子。透明感のある高めの声。守人のバンドで歌っていたあの子の声？ わからない。そ

うでもあるようだし、それともちがう気もするし。お、吸引力だ。吸い込まれそう。だめよ、だめよ。まだ往かないよ。渡さない、渡さない。メノウは渡さない。力の限り、抵抗した。白い建物に連れ込まれたらもう戻れない。なぜそんな思いがやってきたのか。わたしは両手両足をぶんぶん振りまわし、踏みとどまった。油断すると足がかってにバスに乗り込もうと駐車場に並ぶバスをみまわした。ところが、どのバスかさっぱり見分けがつかなくなってしまうた。白っぽい車体だったか、ブルーに黄色だったか。おいて行かれたらどうしよう。置いていかないで。だいじょうぶ。ぜったいにおまえを置いて行ったりしないから。心配しないでいいんだよ、メノウ。メノウ。

あれは、どこのインターだったのだろう。どこまで夢だったのかと思う？
ノドが死ぬほど乾いていた。

帰ってきたらいつものまにか居ついていてネコが押し入れて仔を産んでいた。モティのほうは人に預けていくので安心なのに、ネコは油断がならない。

台所で寝起きしているのである。

おまえがとても嫌がったから、おまえがいるあいだは遠慮していたのだけれど。

正確にいえばわたしが起居しているのは台所つづきの四畳半の板の間、なまぐさなのだ。三年寝太郎おんな版。しかしここまでくるにはけっこう紆余曲折があったのはおまえも知つてのとおり。幼いメノウとの八年の生活のうち、住んでいた家をひとに貸し、中学は神学校に入っておまえといっしょに長崎にきて、わたしは小さなアパートを借りることにした。なんだかしらないけれど突然ビンボーになったわたしの都落ちとひとは憐み、もしくはざまみろと内心快哉をさげんだであるう境遇の変化。

月天心貧しき街を通りけり。

負けず嫌いのわたしはこれから清貧の暮らしをしみじみ味わうのだわといふらしてまわった。

けれどこれからひとりだぞ、と意気込んだものの三か月後には、おまえが苛め事件に巻き込まれ。それにつづく神学校閉鎖。そしてメノウが在宅神学生として家にもどってくるというので急遽上小島にちっちゃな一戸建ての借家をみつけ、ふたたびメノウとわたしのふたり暮らしがはじまったのだ。それから中二の三学期からの不登校ものり越えて、高校から浦上の神学校に入りなおしたのだが、またもわたしのひとり暮らしは長く続かなかった。一年の三学期に退学、諫早の高校に転校、それが卒業を前にしてよもやの退学。なんだかやたら忙しくこんがらがったメノウの神学生生活および高校生活であった。ま、そういうこと。自分に正直にしか生きられないんだからおまえは。うまくずるく器用にすり抜けるってことができないんだね。とにかく長崎を出る、つてまあそうだろうゲンがわるいもの。ここまで踏んだり蹴ったりじゃ。

世間一般のコースからは外れても、一人にひとりの数学的頭脳といわれたのだ、だからどうにかなるだろ。と、横浜は戸塚でのアパートに送り込んで四か月になる。ただでさえ男の子はなべてマザコンになるのだからね、ババコンでかれの人生絡め取ったらいけないよとは都子が口やかましくいうことだ。たしかに思い切りよくぶった切らねば。なかなかにしぶとこのだ、この執着、未練なるもの。ふう、こんどこそ徹底的にひとり暮らしよ、永遠なれ。台所暮らしなのだわ。

おまえも知っているように去年の九月、おまえのお祖父さん、守人とサキの父親、結城大輔が死んだ。喪主は未亡人であるし、メノウを代理に行かせ、わたしは葬儀には行かなかった。サキも帰国が間に合わず、ひとり後から柳川の結城家に向いたけれど、長崎には寄らずにインドに戻ったようだったね。わたしはおまえにサキに会いたければ行ってきたらといったのだけれど、おまえは福岡まで出ようとしなかったね。

ずいぶんクールなものだと思うだろう、人の死に。でも、人それぞれに死にかたが違うように、死なれかたもちがう。守人のときは死、というものを受け入れることができなかった。だからやたらに活発に行動して颯爽をかいさえたのだ。柳川のお祖父さんはわたしのもと夫、遠くのほうで、遠くのほうに旅立ってしまった、そんなふうなのだよ。そのうち昔読んだ小説をじっくり読み返すように彼と過ごした日々を思い返すだろう。

おまえは形見に万年筆をもらってきたね。その包みのなかに古ぼけたタロット・カードがひと組入っていた。これなんだろう、とおまえは不思議そうにいじっていたが、わたしはたぶん結城の妹がこっそりいれてくれたのだろうと察していた。大輔はタロット・カードが好きで誰彼にタロット占いをやってやっていた。わたしの運命を占ったのは別れる直前だったような気がする。

「天はあなたに素晴らしいギフトの数々を授けてくれたのに、あなたはそれらに脊を向けてしまう」

彼が司祭のように厳粛な面持ちでこういったのを覚えている。このカードを、彼はわたしに遺したかったのだろうか。さまざまな形をとっても、愛は消えないものとわたしは思う。きつとおまえはゴクラクトンボと笑うだろう。でもね、いちど出会い愛しあったものは、お互いの人生の一部になってしまふのだよ。

わたしはこれからも高速バスに乗りつづけるだろう。わたしにとってはこの宙に浮いた、いつときの仮死状態を味わうのは、死んでいった人たちとの交歓のときでもあるのだ。交歓、わかる？ パーティなのよ。天国とはいかない、黄泉のパーティ。これはわたしだけの秘密にしよう。

さあ、守人の死んだ夏のこととは終わり。

おまえは小学校五年生のときわたしにハガキを送ってよこしたのを覚えているだろうか。たぶん学校で「家族への手紙」というような課題があったのだろう。

ハガキには雄々しい竜が宙空に躍り上がる図が、色鉛筆で緻密に描かれ、「メノウが五十さいになるまで生きろよ」とその竜は叫んでいた。ちなみにわたしは辰年である。二千三十九年にメノウ五十歳、わたしは九十九歳である。おまえが生きていく世界を、おまえの将来をみたい。その願いのために、神様や天国の存在を信じたい。

それまでにクリヤーさせねばならないことを（おまえ流のゲーム感覚で）片付けなくては。わたしの時刻表はもうあまり空白がないのだから。

メノウはメノウのバスに乗る。もう行先はまかせよう。いつもいつもわたしが口だして決めていたね。志望校。クラブ。ピアノのレッスン。よかれと思ってなんぞのいいわけ、くそくらえ。メノウごめん。こういうことなのよ、やり残したことって。

窒息しそうになってもピーブレイクがあるのだ。わたしもわたしのバスに乗る。

わたしがやることをひとことといえど煮詰まったら動く、だ。じっとしていたらエネルギーが固まってしまう。とりあえず動こう。まず体を動かしたら心もついてくる。くれぐれもいっとくけど高速バスのなかで煮詰まってもメノウ、途中下車してしまったりいかなよ。好きな音楽をヘッドホンで聴くのもいいし。あ、ブライアン・イーノの『アナザー・デイ・オン・アース』よかったよ。ダビングして送ろうか。ローデリアスとトム・ディンガー、どこかでみつけたら教えてね。八十年代ものだから中古のレコード扱ってるところじゃないとないでしょう。

ピー・ブレイクはもうすぐだ。ステップを下りたら歌うもよし。踊るもよし。ただし自分の降りたバスをちゃんと覚えているように。わたしはすぐ忘れてしまい、ちがうバスに乗りこんだりしてしまう。それをおまえはバカにして笑ったね。いいでしょう。こんどはアラビアの砂漠に落ちる夕日を見に行く、といいだすかもしれないよ。

まだまだおまえに話すことはたくさんあるのだけれど。おまえに謝らなくてはならないこと、おお、そうよ。もちろん守人にもね。たくさんたくさんある。持ち堪えられるだろうかと不安になる。そんなとき、高速乗るのがいちばん。生きすすむのが辛くてかたまってしまっても、運んでくれるのよ、高速バスは。

もうモティの散歩に行く時間だ。風頭山の木立のあいだで蚊に悩まされることもないだろう。さつきからしきりにわたしの肘を鼻先で持ち上げている。おまえにもやっていたね。散歩の催促を。

島原半島に向かう高速バスのどこだったか、ピーブレイク・スポットにコスモスが咲き群れていたのを思い出す。秋風の娘たちがわらいさざめいているようだったよ。

これらのものの思いのありつたけを、耐えきることが心の力なのだろう。わらわら、ばらばらなこれは手紙か手記か、どちらでもいい。わたしのピーブレイク・ソングブックだ。

ない日々の到来だわ。わたしは娘の帰国にざわざわした不透明な、これは予感か、戦闘開始、と余分な感情のモヤをはらうべくピールの大ジョッキをオーダーしたのだった。

メノウに贈るカリアル・ジブランのとおきのおきの寓話

夢遊病者たち

「私の生まれた町に、睡眠中に歩く母と娘がいた。

ある夜、静寂が世界をつつみこんでいるとき、眠ったままで歩いていた母と娘は、霧で覆われた家の庭で出逢った。

母親は口を開いて言った。「どうとう、どうとう巡りあったね、わが敵よ！ おまえは私の青春を台無しにし、私の瓦礫の上におまえの生命を築き上げた！ おまえを殺すことができたなら！」

すると娘は言った。「ああ、憎らしい、わがままな老いぼれ女め！ 私が自由になるのをさんざん邪魔立てした！ 私の人生をあんたのつまらない人生の焼き直しにしようとして！ あんたなんか死ねばいいのに！」

そのとき雄鶏が時をつくり、二人の女は目を覚ました。母親は優しく言った。「おまえかい？」

すると娘はしとやかに答えた。「はいおかあさま」

カリール・ジブラン 「狂人」より

小林陽子

略歴

一九四〇年八月 大阪吹田に生まれる。

二〇〇〇年三月 伊東静雄賞受賞

二〇〇三年四月 東北北海道文学賞受賞

二〇〇六年三月 九州芸術祭文学賞長崎地区優秀賞

カルメル修道会在俗者会会員